

# 尾崎喜八資料

## 特別号（第17号）

---

ある夜 尾崎喜八（創作） ----- 2  
愛と創作 尾崎喜八（再掲載） ----- 8

\*

### 特集 尾崎喜八と高村光太郎 後編

「愛と創作」その詩と真実／北川太一 ----- 15  
ロランと光太郎をめぐる人々／北川太一 ----- 24

\*

尾崎喜八資料・特別号（十七号）と  
今後について／石黒敦彦 ----- 34  
ホームページサイト「詩人 尾崎喜八」  
管理人より／満嶋明 ----- 35

\*

シラー作『歡喜に寄する』讃歌  
（譯翻）／尾崎喜八 ----- 36

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会  
2019年2月

妻が死んでから、自分には、たまらなく寂しくなる夜がよくある。居ても立つてもゐられなくなる。部屋の中で目に入るものが一つ残らず思ひ出の種になる。この思ひ出に心を浮べ、妻の残して行つた空氣の中で、様々なことを考へてゐられる時は、いゝ。

しかし寂しさが嵩じ、どうしてもあはれは二度と自分の處へ歸つては來ないのだと思ひ初めると、もうじつとしてはゐられなくなる。自分は直ぐ家を飛び出す、そしてあてもなく歩き廻る。そして疲れ切つて歸つて來ると氣分は幾らか軽くなつて樂になる。今はそう度々ではなくつたが、初めのうちは、毎晩のように自分は散歩をした。散歩といふよりは歩き廻つた。

その頃の事である。自分は、一生のうちにも幾度とはないやうな經驗をした。勿論生れてから今日に到るまで、こんな經驗は一度もした事はなかつた。

自分の力が、此の經驗の事實とその事實の持つ精神とを、より善く生かして呉れば自分は満足である。

曇つた三月の初めの、寂しい晩だつた。自分は昨夜から讀みさしの本の先を讀んでゐた。すると、自分の部屋は往來に向つた二階であるが、往來を此方へ歩いて來る女の下駄の音が、本を讀んでゐる耳に入つた。自分には或る一つの下駄の音の感じがよく分かつてゐた。妻の來る時の下駄の音がそれであつた。どんなに違つた時間にでも自分はその下駄の音で妻だと云ふことを直覺した。そして、自分の直覺は殆んど誤つた事がなかつた。

自分は双方の家庭の事情のために、妻と同棲してゐなかつた。それで妻は、この三年餘りと云ふもの、殆ど毎晩缺かす事なく自分の下宿へ訪ねて來た。

處が妻が死んでからと云ふもの、自分の直覺はあてにならなくなつた。無論此の世にゐる筈はなく、又ゐない者が訪ねて來る筈はないのであるから、頭から下駄の音などを問題にしなくつていゝ筈であるが、習慣は、未だに自分から抜けないで、ともすると自分は、靜かな夜の窓の下に鳴る下駄の音に偽られて、殆ど本能的に、『おや！』と耳を傾けるそんな時は勿論厭な氣持になる。その上『だまされた』と云ふ感じと、『こんなにも自分は彼女の事を思つてゐるのに』と云ふ何かを恨む氣持と、『もうどんな事があらうと、二度と歸つて來やしないのだ』と云ふ絶望的な、やけな氣持とが

一緒になつて、何とはなしに腹立たしくなつて來る。そして仰向けに倒れて太息をつく。そんな時の自分は勿論現世的な考へばかりに支配されてゐる。肉體以上のものは殆んど考へられない。無限のものに對する意識は、この渾沌とした現世的の意識に覆ひかくされて、黒雲のうしろの空のやうである。無限最高の青空は、その片影すらも見せない。

その晩も自分はだまかされた。前に書いたやうに本を讀んでゐると下駄の音がした。同時に、絶へて久しい咳拂の音がきこへた。それが兩方とも妻の特色を持つてゐた。妻は、自分の處へ來る時には、必ず向ふから來ながら軽い咳拂を一つした。自分はそれを、『來てよ』と云ふ合圖のやうに思つてゐた。妻も終ひにはそれを意識してやるやうになつた。

足音と咳拂ひと、この二つのものは完全に、自分を訪ねて來る妻のそれであつた。若し此の時、自分が机の前の妻の寫眞を見てゐたが、或は、はつきりと妻の死んだ事を意識してゐたかしから、幾らその二つの音が似てゐやうとも感違ひするわけではない。しかし、自分はどうかした拍子で、うつかり妻の死んだ事を忘れる事が今でもよくある。と云ふよりも、ぼんやり生きてゐる時と同じやうな氣持である事がまゝある。丁度そう云ふ時であつた。自分は割に身を入れて讀んでゐたから尚そうだつたのかも知

れない。躊躇も反省もなしに、自分はいきなり立ち上つてがたりと窓をあけた。自分は本能的に首を突き出して、下の往來を見た。同時に、『又やられた！』と、殆んど雷光の速さを以て自分は心の中で叫んだ。

あゝ、しかし、未練は、愚かな執着はこんな時にも自分のうちに頭を擡げる。此の未練は、言葉を以て現はせば、『念の爲め』と云ふ意味になつて、自分の憐むべき妄想を認める唯一のものであつた。自分は此の『念の爲め』を口實にして、そして實際、『若しや』と云ふ自分ながら可哀さうな、空な心だのみを抱いて、今丁度下を通る女の姿を見下した。此の時一刹那の緊張の仕方は、氣の毒な位強いものであつた。

しかし、それは、妻に似てもつかない女であつた。

『當たり前だ！ 馬鹿！』と、自分は自分に怒鳴つた。しかし次の瞬間には、悲しみとも、寂しさとも、やけども、恨みとも、一口には到底云ひ現はせないやうな、複雑な、絶望的な氣持になつて自分は横つ倒しになつて、頭をかゝへて唸つた。

しかし、渾沌の闇から遠く蒼白い曙の來るやうに、暗黒な雑念に煙り切つた自分の頭の中にも、次第に冷徹な、澄み通つた理性が、水のやうに浸みて來た。苦しい興奮は靜まつた。しかし今度は本當の寂寞の感じが氷のやうに張りつめ初めた。是こそ自分の最も苦しく思ふものであつた。この兆

候を此頃の經驗から知り初めた自分は、矢庭に起き上つて、木箱から一冊の薄い本を抜き出して家を飛び出るやうに出た。

自分は初めに書いた不思議な經驗とは是から書くものゝ事である。

自分は足に任せてどんどん歩いた。自分の家は厩橋の近くにあつた。自分はその橋を渡つて隅田川の向ふ側の町を歩いた。割下水を眞直ぐ進んで餘程行つてから左へ折れた。まるで知らない場所を曲りくねつた暗い寂しい道ばかり歩いた。すると業平橋の近くへ出た。それから小梅へ出た。そしてとうとう向島の堤へ上つた時は、『一時間は歩いたな』と思つた。

小梅へ來た時分には、自分の頭は平常に復してゐた。もうさつきの自分ではなかつた。自分はよく酔つたやうな氣持になる。

自分の母が、子供の頃の自分に、よく『お前、そんなに癩癩を起こすと氣狂ひになるよ』と云つた。年をとつてからも自分にその癖は抜け切りには抜けなかつた。家を飛び出した時がそうであつた。唯、一つ確かな事は、若し疲れて何處かで休む時のために、自分が本を一冊抜き出した事と、その本が、ある英吉利人の書いたベートゼンの傳記で、それを特に自分が突差の間にも擇んだ事であつた。

自分は外へ出る時は大抵何か一冊本を持つて出る癖があつた。讀まないでしまふ事もよくある。しかし電車などで、本を持つ

て來ないとなると、怠屈で、何となく時間を空につぶすのが馬鹿らしくつて仕方がなくなる。そして持つて來なかつた事を後悔する。それが癖になつた。その晩も自分は、本だけ擇んで持つて來る餘裕が、頭のどこかにあつたに違ひない。

自分は吾妻橋を渡り切つた時一寸考へた。このまゝ、駒形の河岸を通つて歸らうか。どこかで休むで歸らうか。

どんどん歩いたので陽氣は寒い方だつたが自分は汗をかいてゐた。それに咽喉も乾いてゐた。それでどこかで休むで歸らうと思つて淺草の公園へ行く事にした。時計をみると、もう十時半を過ぎてゐた。

自分は或る珈琲店へ入つて、その一番隅の食卓に向かつて疲れた身體を椅子に凭せた。そしてソーダ水を命じた。一息にそれを飲み乾して代わりの來るのを待つてゐる間に、又もや自分は、さつきの情けない感情に似た感じの、しかし今度は或る諦めを混へて、靜かに湧いて來るのに氣がついた。それは自分がこう云ふ處へ來る時、妻を失つてから時々感じる種類のものであつた。そしてそれは常に一つ一つの思ひ出を持つてゐた。自分は一度こゝへ妻と一緒に來た事があつた、それが又も自分に或る寂しさを感じさせるのだと云ふ事には、初めから氣がついてゐた。自分はつとめて忘れやうとした。そして持つて來たベートゼンを讀み初めた。

代りのソーダ水が来た。自分はコップを口へ當てながら見るともなしに此の珈琲店の中を見渡した。廣い部屋の中には自分を入れて十二三人位の客しかゐなかつた。もうおそかつた。入り口の硝子戸には、布が下ろしてあつた。

見渡した自分の視線は、ふいと二つの鋭い視線にぶつかつた。自分はその視線を避けないで射返すやうにその目の持主を見つめた。それは見た事のある顔であつたが直ぐには思ひ出せなかつた。自分は、斯くも大膽に自分の顔を見つめてゐる男は誰であるかと、その名前を思ひ出さうと考へた。顔はたしかに幾度か見た顔である。しかし名前は？　そしてどこで見たつけ。おゝ！と自分は思ひ出して心の中で叫んだ。『あいつだ。あの男だ。ピアノストのBだ。』

そう氣がつくと、自分は、知らぬ顔でどこと云つて極つた處もなく目をやりながら、しかしそれとなく彼の視線を避けながら彼を注意して見た。

それには譯がないではなかつた。自分が今Bと書いた男はピアノストであつた。自分は彼を四五年前に初めて神田のある學校で見た、その時彼はシヨパンのものと、リストのものを弾いた。自分はその以前彼より良い人のを聞いたことがなかつたので、かなり感心した。そして眞面目さうな、いゝ奴だと思つた。その後違つた場所で三二度彼の演奏を聴いた。段々耳の肥

へて行く自分にとつて、もう彼は最初のやうな魅力を自分に與へる事は出来なかつた。只、初めての時の印象は、忘れ難いものとして、今も腦裏に残つてゐる。そしてその頃が彼にとつても、少なくとも得意に近い時代であつたに違ひない。當時彼は三十一二の青年であつた。

彼が淺草の芝居小屋へ出ると云ふ新聞の廣告を見たのはそれから二年程立つてからの事であつた。自分は變な氣がした。どんな事情からそんなに身を落とすやうになつたのか知らないが、是は又少しひどすぎる話だと思つた。その頃自分はロマン・ローラの音楽家の評論を本にして出して間もない時だつたし、ベルリオの自傳を譯し出してゐたので、若い不遇な音楽家には、一種の愛を感じてゐた。何となく味方になつてやりたいやうな、幼稚さを混へた愛を感じてゐた。それでBの境遇にも同じやうな動機から同情した。元より自分は彼の事情は何にも知らなかつた。只しかし、それが主として金のためだと云ふ事だけは容易に想像のつく事柄だつた。『誰が好きこのむで、淺草あたりまで下つて行くものか。それは俗衆に媚びて藝術を賣ることだ。あいつにとつても是は餘程の苦しい境遇から決心したことに違ひなからうし、又、たまらなく厭な事に違ひない。斯んな事さへ自分は、はつきりでなくつても、漠然と考へたものである。

彼は公園の或る芝居へ出てゐた。そこでピアノの獨奏をしてゐた。自分は二年ぶり位で初めて彼を淺草公園の小芝居の舞臺の上に見出した。

彼はその時ベートゼンの『アツパシヨナタ』を弾いた。自分は彼の周圍や、馬鹿な觀客に對する不快の反動から、彼に好意を持つ事が出来た。そして彼は、こんな場所へ出ることはその時はまだ初めての経験からか、極めて眞面目に、場所柄には不調和な程うぶな態度で弾いた。自分はその氣持ちにも同情した。そして、今考へると冷汗のやうであるが、『アツパシヨナタ』の途中で、觀客の中の二三人が、『もう澤山だ、止めろ止めろ！　そんな木琴の寢言見たいなもの！』と叫んで満場を笑はせ、彼の顔を眞赤にさせた時、自分は眞劍になつて、特等席から『馬鹿！』と怒鳴つた事がある。その時自分は昂奮した餘り、彼に會つて、その藝術的貞操を汚さないやうに、本當の味方はその人間さへ善ければどこかにゐるからと云つて慰めてやらうかと思つた。そして實際、樂屋へ通じる廊下を決心がつき兼ねて往つたり來つたりした事があつた。しかし自分は止めた。自分の同情を素直にうけて呉れゝばいゝが、さもなければつまらない俠氣だとも思つたし、又、彼に對する自分の信用を實際よりは少し過ぎてゐはしないかと思つたからでもあつた。

その後三四度違つた芝居で彼の演奏を聴

いた。その度に自分は彼の藝術的良心が荒んだやうに感じて好意に持ちにくくなつた。反感は持たないまでも、以前よりはずつと冷淡になつた。その後自分は一年近く彼の演奏を聴く機会を作らうとしなかつた。自分は殆ど彼のことは問題にしなくなつたし、忘れてしまふやうになつた。

その彼、Bに今自分は逢つた。彼が時々穴のあく程自分の顔を凝視するのは、自分の目付きがどことなく他の人間と違つてゐるからか、或いは少し酔つてゐるらしい彼の目が、誰かと自分とを思違ひさせてゐるからか、と思つた。彼は少し酔つてゐた。連れはオペレットの俳優らしい若い男が三人と、そう云ふ社會の人間と友達づきあひする事を名譽位ひに考へてゐるらしい。たまらなく輕薄な顔をして、流行の洋服を着た青年が二人であつた。Bは、彼等とは段違ひに、殆んど見すばらしいと云ふのに近い古い着物を着てゐた。

彼等の食卓には、七八本のビールの壘が空になつてゐた。彼等はビールを飲みながら、問題にならない程度の音樂の智識を振り廻し合つたり、馬鹿すぎる噂を話題にして大聲で饒舌つてゐた。彼等はよく下らない事に笑つた。その笑ひ方にも彼等らしい處がよく現れてゐた。即ち、俳優達は二人の青年のやうに、どこか金持ちの息子らしい風を模倣しやうとした。そして又二人の青年の方は、つとめて俳優位に見られたい

やうな、不思議な表情をした。要するに何も餘り大差はなく、丁度いゝ仲間のやうに見える位、下等な一團であつた。

只、その中で一人孤立してゐるやうに見えるのはBであつた。彼は殆ど彼等と話をしなかつた。たまたま誰かゞ話を持ちかけても心から取り合ふ様子は見えなかつた。直ぐに沈黙した。そうしてビールを飲んで是不機嫌らしい、充血した眼をあげて天井を見つめてゐたり、食卓を四つ程へだてた自分の方を見たりしてゐた。

自分は、Bも變つたなと思つた。彼の鋭い目は深い目とは違ふ。それは不攝生と、荒んだ生活を背景とした彼の精神を反映する、粗暴な自暴自棄的な、皮肉な目付であつた。正しき者の嫌ふ目であつた。その光は小魔を喜ばす光であつた。俗に『凄い』と云ふ、そう云ふ種類の目であつた。

その目が時々自分の方へ注がれる。自分は氣持がよくは無かつた。

彼の他の仲間の一人がひどく酔つて、ビールのコップを差し上げながら、何とか女史と何とか君のために乾杯しますと云つた時、そして他の仲間が笑ひ出した時、今迄時々さげすむやうな目を以つて彼等の顔をちろりちろり見てゐたBは突然立ち上がつて自分の方へ歩いて來た。

その瞬間自分は、『己に喧嘩でも仕掛けるのかな』と思つた。酔つた人間は、よく『顔を見てゐた』ことを言ひがりにして

喧嘩を賣るものである。自分は立ち上がつて勘定をして出やうと思つた。之等の考へは實に一瞬間の事であつた。Bはもう自分の前に立つてゐた。そして一寸頭を下げた。

『何ですか？』自分は密かに防ぐやうな態度と決心で斯う云つた。さつきから時々頭をかすめた『Bは變つたな』と云ふ考へが、今や此處で事實を以て證明されるかのやうに、自分は不安を感じた。

『失敬ですが此の本はベートゾンですか？』斯う聞いた彼の言葉の調子は、案外眞面目でもあり、確かでもあつた。しかし自分は或る種の人間が云ひ掛りを云つたり強請したりする時、いざと云ふ場合に現はす性根の惡を強めるために、最初はおとなしく、したて下手に出るものと云ふことを知つてゐた。たとへその場合のBに、この智識や感じのやうなものを當て箝めたのは氣の毒であつたとしても、確かにそうだと自分は思つた。それで

『そうです』と簡単に答へた。

『實はさつきあなたが便所へゐらした間に一寸表紙をのぞいて見たんですが』と彼は兵卒のやうな姿勢をして、變にむきになつて云つた。自分は尚固くなつた。彼はその先を云ひたさうであつたが言葉を切つた、そして自分の顔をじつと見た。

『そうですか』自分は斯う云ふより仕方がなかつた。是以上何か云ふ事は、まだ心から警戒の手をゆるめない自分には不可能

であつた。彼の仲間はその方を見てにやにや笑つてゐた。『馴合つてゐるのかな』と云ふ考へが頭にひらめいた、しかし『まさか』と自分は思つた。

『濟まないですけど一寸讀ましてもらへませんか。ベートゼンを僕は尊敬してゐるんです』

彼は飽くまでも眞面目であつた。その調子の内にはどこか悪ずれのしない、云ひにくい頼みを思ひ切つて口に出すものの耻しさうな感じがあつた。何となく正直な、頑固な、素朴の處があつた。是等の感じが一つになつて自分の先入觀念をうちこはし初めた。自分は彼の他意ない心持を信用しないのは悪いと思つた。少し疑ぐりすぎ、相手を悪者にひとりぎめしすぎてゐたと思ふと耻づかしく思つた。考へが此處まで來ると、自分は、彼のピアノリストである事を自分が知つてゐる事を知らしたく思つた。そうしたら何かの動機で彼に自重心が出、現在してゐるであらう自堕落な生活から飄然と目を醒まして正しき道に立ち歸る、是が何かの機縁となりはしないかと思つた。しかし是は丈け書いた自分の考への筋道は極めて瞬間的に進むのである。自分は云つた。『僕は君のピアノを四年許り前に神田で聞いた事があります。あの時はひどく感心しました。』

『おゝ！そうですか』と彼は驚いて唸るやうに云つた。彼は自分の顔をじつと見

つめた。彼は明らかに自分の一語によつて興奮したやうであつた。自分も自分の斯う云つた感情で興奮した。

『そうですか。そして此頃は？』

『此頃は聴きません。君のは。』

自分は云ひすぎたかなと思つた。そして慰めの意味で云ひ足した。

『此の本貸して上げて下さい、のですよ』

『そうですか、ありがたう。此頃の僕は實際駄目です。』

彼は斯う云ひながら、急いで本を手にとつて立ちながら頁をはぐり出した。彼の輝く兩眼の上には、かぶさるやうに太い眉毛が八の字を寄せてゐた。唇は固く結ばれて、鼻は時々つく吐息のためにひろがつた。彼は或る頁を見出して貪るやうに讀んでゐた。自分は彼の表情から目を放たずに、その興奮した顔面を見つめてゐた。三分間位立つた。と彼は突然『おゝ！』と短い、しかし太い、腹の底から出たやうな吐息をついたかと思ふと。

『ありがたう。ベートゼンは矢張り一番純潔な人でした。』と吐き出すやうに云つて、自分に本を返した。自分は前よりももう一步進んで彼に忠告して見やうと思つた。しかし彼はすぐにその後から斯う云つ放つて向ふへ歩き出した。

『弾きませう！』

彼は壁につけて据へてあるピアノの方へ進んだ。そして椅子に腰を下ろして蓋を上

げると、いきなり恐ろしく早いソルフェジオ（音階練習）をやつた。彼は戦線に立つて兵を閲する將軍のやうであつた。

人々はその音をきくと一齊にピアノの方を向いた。彼の仲間のある者が立ち上つて彼のそばへ行つた。そして、酔つてもつれた舌で

『おい。今頃何を初めるんだい。歸らうよ。あの子が待つてるよ』と云ひながらBの肩を卑しい女のやうな手付で叩いた。Bは右手で強くその男の手を拂ひのけておいて、さて弾き初めた。

手を拂はれた男は

『ひどい事をしやる』と、熊と大きな聲で呟きながら元の席へ歸つてぐたりとなつた。部屋はしいんとなつた。皆耳をかたむけてゐた。

それは『ムーンライト・ソナタ』であつた。

今や此の廣い一間はベートゼンの音楽の海のやうになつてしまつた。一切が彼の天才の驚くべき力で征服されてしまつた。人々は半ば口をあけてぼんやりした。一つの物音もしない夜更けの珈琲店の一間の中を、輝くやうな音の波が互ひに打ち合つて渦巻いた。

Bは額に太い血管を怒張させて、指先は蛇の様に鍵盤の上をうねり廻つた。頬には汗がたらたらと流れてゐた。

自分はこの立派な、熱情に溢れた演奏

を聞いた事は未だ曾てないと云ふ氣がした。是はBにとつて復活の演奏だと思つた。人間の復活の力が、これ程までに熱情に燃えるかと思ふと涙ぐましくさへなつた。自分はBのために祝したい氣がした。そしてベートゼンの偉大を心から認めた、Bにも何か感謝の記しを示したかつた。自分はBが讀みたがつた此の本を、今日の日の記念のためにと自分の心の感謝のためにBに贈るのを最もいゝ方法だと思つた。Bも喜ぶにきまつてゐると思つた。

自分は立ち上つてピアノの方へ進んだ。音楽はまだつゞいてゐた。自分は萬年筆を出して本の扉に

『B君におくる。君の立派な演奏への感謝のために』

と書いて年月日を入れた。

自分はそれを持つてピアノに近付いてわきの題に載せた。Bは一生懸命に弾いてゐるので解らなかつた。自分は少しはなれて立つたまゝ聽いてゐた。

遂に音楽は終つた。Bはピアノの蓋をすする時に本に氣が付いた。Bはそれを取り上げた。そしてそれを持つて滴り落つる汗を拭きながら自分の方へ近寄つて來た。その顔はさつき迄の彼とは別人のやうに輝いてゐた。自分は嬉しかつた

『ありがとう。すつかり感心しました』と自分は云つた。

『いや。あなたと此の本のおかげです』

と彼は云つた。そして自分の手を握つて強く振つた。彼は涙ぐむでゐた。自分も涙ぐむでゐた。

彼は自分がベートゼンの本を彼におくつたのを知らなかつたので、

『此の本を二三日貸していただけなくてせうか。讀み終わつたらすぐお返しします』と云つた。自分は、

『是は私から君に御禮と御祝いに上げませう。よかつたらとつておいて下さい』と云つて、彼の手に本を渡した。

彼は心から喜んだ。その喜びは演奏してゐた時の興奮と好箇の對象を以て限りなく美しいものであつた。彼は夜の明けたやうな顔をした。兩眼は、濃い、うづまいた髪の下から星のやうに輝いてゐた。

彼は自分の住所と名前をたづねた。自分は名詞を持つてゐなかつたので紙に書いて渡した。彼も書いてくれた。自分は彼に自分の住所を知らせながら、少しの不安さへ感じなかつた。

皆勘定をすまして外へ出た。もう十一時半であつた。彼は親しげに帽子をとつて自分に御辭儀をした。自分も彼と同じやうにした。自分達は右と左へ別れた。別れる時彼を見たら、彼は大切そうにあの本をかゝえてゐた。自分は嬉しかつた。心がある處まで届いた氣がした。自分は七八間行くと振り返つた。その時、仲間と別れて別の方向へ急いで曲つて行く彼の後ろ姿が瓦斯燈

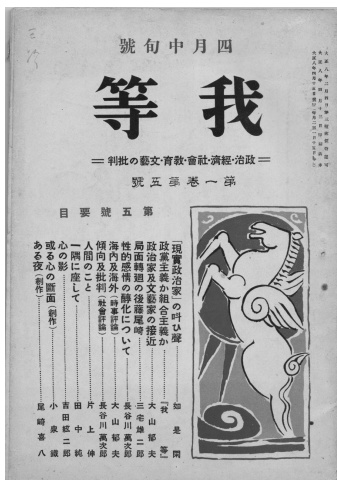
の光で見えた。

自分は、ある一つの感情を抱いて家路へ向かつた。それは喜び以上のものであり、悲しみ以上のものであつた。否、それらはすべての上にある、一つの名状し難き清き感情であつた。それは永遠或は不滅とでも名付くべきものゝ感じであつた。しかし今の自分には未だ未だ一つのそう云ふ清き感じと云ふのみであつて、はつきりと口には云ひ現せないものである。

(完)

「我等」第一卷第五號 所収  
大正八年二月四日十五日發行

入力及び資料提供…堀 隆雄



室の中は静かだった。絵を見る人は四五人しか居なかった。皆足音をさせるのも遠慮するらしく、併し眼を輝かして掛け連ねた一枚々々の画布の前に立止つて居た。暖炉は平和な眩きを洩して戸外の寒気はこゝ迄は襲つて来なかつた。

百枚に余る画布は凡てその処を得たやうに落著いて居た。そこには官設展覧会に見るやうな死物の混乱はなかつた。生き生きとした生命の凝視があつた。呼吸をのむだ気魄があつた。真摯な空気が見る人の胸を圧した。その圧迫する精神は真に充実した生活の痛い快感であつた。或る森厳さが見る者の心に破裂し切らぬ感情の苦しさを与へた。叫ぶ事の出来ない昂奮が此の静けさの内に音もなく渦巻く生命の流れを渦巻かせて居た。

それは陳滞し切つた日本現代の絵画界に最初の烽火を上げた新しい書家の展覧会であつた。それは反逆であつた。古きもの、墮落したもの、そして芸術の仮面を以て日本の絵画界に跳梁する者に対する反逆であつた。權威ある如く見ゆる多勢の者に、若き少数の人が挑みかゝる反対の旗幟が若し反逆と呼ばれるならばそれは明かに反逆であつた。何となれば彼ら少数の芸術家は、多年平和の逸民であつた觀衆をおどろかし、虚偽の芸術にその權勢を独擅して居た所謂老大家や、その追隨者なる群小画家に向つて最初の火蓋を切つたからである。それは真実の爲めの戦ひであつた。そして虚偽なるものが一世を支配する時、一人真実の鉦を提げて立向ふ天才が蒙る反逆者の名を彼等少数の者は邪道にあつて邪道を知らない芸術家や、彼等を庇護する民衆から冠せられた。その戦ひは身顫ひを感じしめる悲調を帯びて居た。そして民衆の内にあつて、猶虚偽を憎む少数の者の胸に同じ悲壯さを伝へしめる。男性の気魄。男性の涙。男性の征服慾は彼等真実なる芸術家の制作を通じて若き真実なる觀衆の心に電流の様ひびき渡る。

若き達雄は此の電流に心を顫はせながら次から次へといきをつめて見て行つた。危く爆發しかゝる昂奮の叫びを押へながら画布に顔を押しつける程近く身を寄せて見て歩いた。

百枚に余る画は僅か五人の芸術家の手になつたものであつた。その中の三人の名を彼に既に知つて居た。彼はその三人の制作を曾て二度許り見た事があつた。そして今の此の充実し切つた制作を見てその進歩に驚嘆した。

D……と云ふ画家の或る肖像画の前に立つた時、彼は太い溜息をついた。「余りびつたりして居る。是こそ真の肖像だ。所謂大家の中に此の一枚にも比敵し得る肖像を描く奴が一人でも居るか」蒼白い二月の雪の日の光線を上から受けた肖像の前に彼は寒さと熱さの二つに顫ふ身顫ひを禁じられなかつた。彼は此の画家の性格の内に或る寒い嚴肅さを見た。筆触、にも色彩にも、そして絵画全体に行亘つて居る調子の中にも。勿論そこには云ひ知れぬ愛があつた。併し余りの懐しさに我を忘れて縋りつかうとする時、その狎れ難い嚴肅さに自ら耻ぢて身を引く者の感情がその時の彼の感じた感じであつた。彼は重圧するD……の意力に呼吸苦しさを感じた。

若き彼の内には併し此の寒い程の嚴肅さは入り難かつた。彼はもう少し温かいものを欲して居た。其の時代の彼を迎へて呉れるものを欲して居た。彼の内から衝き上げて来る感情を優しさの手で抱き上げて呉れるものが欲しかつた。元より彼は嚴肅を愛して居た。そしてそれが持つ至上の生命を知つて居た。併し明徹な線を欲するよりも、



豊かな愛を盛る色彩を欲して居た彼は、デューレルよりもドラクロアを愛する彼であった。D……の画が彼の内に或るものを目醒まし、警めたにも拘らず、尚彼の重苦しい圧迫と冷静な理知とは達雄をして同胞に對する様な感情を起させなかった。それは彼が情緒を喜ぶ処から来て居るものであった。併し彼の喜ぶ情緒は元よりセンチメンタリズムのそれではなかった。彼の内にも真実と力とを欲するものがあつた。それで彼は救はれて居たのだ。多くの青年が渴仰する感傷の誘惑から救はれて居る事が出来たのだ。

彼が此の愛すべき者を愛し得ざる悲しき矛盾を感じながらD……の制作を見終る次にはT……の十数枚の画布がD……のそれとは殆んど対角をなすまでに異なる色彩の豊かさを以て並んで居た。彼はその中の山岳を描いた一枚を見るや否や「是だ」と思った。「是こそ今の自分の欲して居るものだった。是こそ自分の同胞だった。此の筆触、此の温かい色彩こそは自分の欲して居た凡てであつた」。

そこには大地の盛り上る底知れぬ力があつた。大地の脹れ上つて出来た山の真実があつた。そしてその禿げた一部には大地の力の断層面が素裸に出て居た。濃い緑に覆はれた部分には見る者をひきつける山岳の寂寥と崇高とがあつた。彼はびつたりと此の画家の心に自分の心を触れ合す様な気が

した。彼の内に明確でなかつた溢れる様な青春の感情が、遺憾なく、しかも非常な確かさを持つて表現されて居ると思つた。そして自分の内に沸騰して居る形を具へない力がしつかりと把握されて居ると思つた。彼は一枚々々と見て行つた。そしてその画家の自画像の前に立つた時彼は昂奮の極致に達して居た。

「同胞だ。そして友達だ。自分はこゝに自分を抱き上る手を見る。此の画家こそ自分の友とすべき人だ」。

彼の斯かる烈しい感銘は彼をして此の画家に手紙を書く事を決心させた。併し彼は此の躍り立つ感謝と歓喜の一方に恐ろしさのある事にも気が付いた。その点で彼は自分の未だ幼稚である事を知つて居た。彼は是迄殆んどあらゆる芸術家に対して個人的の交際をした事はなかつた。そして又、多くの日本現代の芸術家に知己を求める気にもならなかつた。それにしては彼は少し成長しすぎて居た。そして彼等を軽蔑して居た。併し彼がT……に手紙を書きT……に会ひ度いと思つたその感情は極めて純粹に尊敬の念の発露したものであつた。そして尚此の芸術家の制作に現はれて居る処から察すると彼にはT……が喜んで彼を己れの画室に招じ入れる類の人である気がした。彼はその時の様を想像した。そして微笑むだ。彼の前に宛もT……自身を立てて居て彼の若々しい元氣ある、そして在りのまゝ

なる感情のあふれた顔を見て微笑して居る気がした。彼の心は此の喜びに一杯になつた。彼はあらゆる楽しい場面を想像した。そしてその想像の中に浸り入つた。

戸外には雪が降つて居た。併し高潮し切つた彼にとつて降りしきる雪も風も何でもなかつた。彼は一時も早く帰つてT……に手紙を書かうと云ふ欲望に駆られながら展覽会の硝子戸を押した。そして出がけにも一度会場の中を振り返つた。そこにはD……の肖像が目に見えた。彼は一瞬の間寂しい気がした。併しそれも亦一瞬の間に消えた。

外は真白な雪景色だつた。彼がひろげる傘の下から巴の様に降りしきる雪片が彼の顔に舞込んで當つた。街路も家々の屋根も積雪の中に埋もれて、その中を電車が冷たい響きを立てゝ走つて居た。彼は頭を下げ、傘を傾かせ雪とは全で違つた事を考へながら急ぎ足に歩いた。そして附近の停留所から電車に乗つた。

彼は自家へ入るや否や女中の畏つて挨拶するのも分らない程急いで自分の室へ入つた。家の内は静かだつた。両親は芝居へ行つて居なかつた。「彼等には芝居が相当して居るのだ」彼は斯う思つて微笑した。併し喜悅と期待とに充たされて居た其の時の彼は日本の古い芝居を見に行く両親に對しても軽い愛を感じて居た。

人々には人々相当の芸術に対する娛樂乃至満足がある。彼等に鋭い批判の力と眞実なものを愛する魂が缺けて居れば居るだけ、彼等を娯ましめ、満足せしめるものは多い。何となれば現世に於ても低級なるものゝみが広大な領地を持つて居るからである。センチメンタリズム。庸劣なるヒューマニタリアニズム。卑しき性慾描写の爲めの性慾描写。病的嗜慾を芸術の羅をもて覆へる。

悪魔主義。誤れる現実主義……

併しそれは眞の芸術ではない。そして斯の如き邪道に棲息するものは眞の芸術家ではない。彼等は弄ぶ感情を名付けて芸術と云ふ。概念を名付けて思想と云ふ。彼等はそれを以て得々として居る。彼等にとつて芸術は高尚なる遊戯に過ぎない。思索に於ても殆んど此の事が云へる。そして尚現代の彼等にとつては高尚と云ふ二字すらも適当しないのだ。彼等の書くものは醜業婦との恋であり、昏酔を喜ぶ奇形なる神経であり。詩化<sup>ポエタイズ</sup>したる性慾であり、人間の庸劣から来る悲劇であり、外殻を撫で廻す英雄主義<sup>イイズム</sup>である。彼等の背景に人類はない。人類の運命もない。そして云ふ迄もなく一点の愛と雖もない。

達雄はそれをK・Tに見、H・Iに見、J・Tに見、S・Tに見、R・Nに見、G・Sに見、そして彼等の無数なる追隨者等に

見た。絵画に於ても彼等の虚偽が現代をまよはしの地に導いて居る事を達雄は知り抜いて居た。

彼等には愛がない。孤独に堪へ得る気魄がない。堅実なる思想の根底がない。偉大なる者を尊敬するハンブルな心がない。斯くて彼等はトルストイを嘘つきとし、ドストエフスキーをプロットの作者としストリンドベルヒを大いなる狂人とし、ブレークを魔術画家とし、ロダンを現代の野蛮人とし、メーテルリンクを凡庸な思想家として耻ぢないのだ。彼等は実にいまはしき精神的悪疾に犯されて居る。ゲエテを以て云はしむれば、「その病の癒ゆるに非ざれば筆をとるに価しない」輩である。

何となれば芸術が人類に立脚し、人道に捧仕する処に於て初めて芸術であるからである。そしてそれこそは芸術の最初にして最後なる目的であるからである。人類の運命に立つものは寂しい。そして人道に對つて進む旅路は遠く孤独である。彼は寂寥を友とし、現実の幾多の苦惨によつて肉体的にも精神的にも傷けられながら、創造の喜悅に力づけられつゝ遙かなる人道に足を進める。やがて来る肉体的死滅にその身を任せるために。併し彼の靈は永遠に亘つて人類の上に輝く。それはベートオフエンの所謂「苦惱を通しての歡喜」である。そして之こそは男子の一生を捧げて惜しからざる偉大なる業である。

此の考へが彼達雄の内に湧き上つて居た時、併し彼はそれが彼の理想であるに過ぎない事を知つて居た。彼は思念の中にこそ勇者であれ、その生活に於ては決して勇者ではあり得なかつた。彼は手淫慣習者<sup>マニエユアリスト</sup>であつた。卑しむべき彼の行為は此の一点を以てしても彼の自信を破砕するに充分であつた。一方鷲の如きヒロイックなる氣魄に充されて居る時、他方に於て暗き性慾にその肉体、精神を消耗しつゝあると云ふ事、そしてその内なる衝動の暴威に勝ち得ずして醜き屈辱の地にまみれると云ふ事、それはなんといふ痛ましき矛盾であらう。そして彼が感ずる此の矛盾苦痛こそは、屈辱こそは、悔悟の念こそは彼が偉大なる人々の事業を想ひ、自己の使命の高きを思ふ次なる瞬間に於て、彼の内に性慾の勃発を感じ、此の衝動に勝ち得ずして彼の信念の痛ましくも裏切られる時、更に烈しく強く彼を責めさいなむのであつた。

卑しむべき自家逐情。彼は此の行為のはかなき歡樂から醒める時、茫然として自失したる彼自身を感ずる。彼の全ては空虚である。彼の世界は此の時暗黒である。その暗黒の中に醜くも蒼ざめて座つて居る自己を見る時彼は自己の生くるにも価しない者である事を感じる。そして自己の醜惡なる性慾を咀ふ。併しそれは云ふ迄もなく彼の弱い叫びにすぎないのである。

「俺はもつと聖くなければならない。俺

は精神的にも、肉体的にも、もつと健全でなければならぬ。俺の不健全である事は此の汚れた常習を見ても充分なのだ。人間が精神的に健康であると云ふ事、それは何と云ふ大いなる事であらう。余りに見るに堪へない暗黒から俺は自分で自分を救ひ上げなければならぬのだ。自己を救ふ事すら出来ないものが如何にして他人を、況んや人類を救済する事が出来やう。それは少くとも虚偽である。冒瀆である。そして一生をかけての事業に比較して何と云ふ耻づべく、唾棄すべき行為であらう」

彼は斯う悔いる事によつてその良心と勇気だけは盛り返す事が出来た。併し彼のいまはしき痴行の結果は明かに目に見えて肉体的に疲労を与へた。そして彼の精神すらも実はその肉体と同じく半ば眠り半ば醒めて居たのである。

併し今、その室に入った彼は此の性慾を感じて居たのではなかった。彼は実際半月余り其の誘惑に打勝つて居たのであつた。そしてその事は今の彼の念頭に影すらもさして居なかつた。

彼は文章世界の新年号にT……の住処が他の多くの文士、画家達のそれと共に載せられて居た事を知つて居た。それで彼は室の一隅に積み上げられた雑誌の堆積の中から文章世界を引出してT……の住処を見出した。

「京橋区月島東仲通……」

達雄はT……の家が彼と同じ区の内にある事に不思議な暗合を見出して喜んだ。達雄の家は隅田川に面して京橋区の東北の突端が日本橋区の東の一隅に接して居る処にあつた。T……の家は彼の室のすぐ目下を流れる隅田川を越して右方に横はる石川島の河口に延長して東京湾に面する処にあるのだつた。そこは彼が少年の時から旧知の場所だつた。今こそ人家や工場が稠密して都会の一部を形作つては居るけれども、達雄の少年の頃は雑草の生ひ茂つた原野であつた。そして処々に小さな百姓家らしい家が点在して春は雲雀が高い空で鳴いて居たものであつた。彼はよくバツタを捕りに行き、ダボハゼを釣りに行つた少年の日を思ひ出した。そして今、その追懐多き地に自分の尊敬する、そして自分の訪れやうとするT……の画室のある事をなつかしく思つた。

彼は書簡紙を机の上にひろげてペンを握つた。そしてどう云ふ文句から書初めやうかと悩むだ。

多くの青年がそうであるやうに、そして殊に青年の尊敬の念が一向であればある程尚更そうであるやうに、彼も自分の内にT……に対して殆んど盲目に近い信仰を持つて居た。それが為めに此の場合彼の内に群がる尊敬と感謝との念があるがまゝに表白する事が唯一の事であるにも拘らず彼は自

己の幼稚さをかくさうとした。彼は幾度か書き損じて幾枚かの書簡紙を癩癩を起して破り棄てた。そして遂に彼が心の中に組み立て、居た処のものよりも遙かに短い手紙を書き上げた。そしてそれは自己の幼稚さをかくさうとした、ために短くなつたものであつた。そして尚、そこには明かに幼稚さが現はれて居た。

何と云ふ愛すべき苦心であらう。併しそれは或る時代に於てのみゆるさるべき事である。何となればそれは奴隸的精神の一の変形だからである。先づ人は眞実であらねばならぬ。他人に対しても、自己に対しても。そして在るがまゝなる自己を枉げてまでも他人の感情を慮る時、それは醜業婦の媚態である。彼はそれをよく知つて居た。それがために彼は屢々苦しんだ。

「此の突然の手紙はあなたを驚かせるかと思ひます。併し凡ての無様が純粹な感動から出たものならばそれがあなたを傷けない限りであなたは私の此の無様をも許して下さいと思ひます。」

今日あなたや、あなたの友人の方達の展覧会を見に行きました。そして深い感動を受けました。日本にあなたの方の様な画家の居られる事を心強く思ひました。文壇に於て私は「S」の二三人達を尊敬して居ます。併し絵画界にあなたの方の居る事を今日程強くありがたく思つた事はありませんでした。それは今の私にとつて一の大きな刺戟であ

り慰めてありました。殊にあなたの絵を見た時、同族の中での同属である事を感じました。今でも今日の昂奮が私の中に漲つて居ます。何よりも先づあなたに御礼を云ひたくて、そして私の尊敬を表白したくつて此の手紙を書きました。

あなたの御住所は文章世界で知りました。機会が来たら伺ひ度く思つて居ます。私の家はあなたの処からさして遠くない処にあるのです。返す返すも無礼を御許し下さい。」  
彼は此の手紙を読み返して見た。そして直ぐ女中を呼んで出させた。

彼の心は喜悅に充たされてゐた。自己の尊敬する人にその敬愛の念を打ちあげると云ふ事の云ひ知れぬ喜ばしさよ！彼の純真な心は芸術家の優しき魂に流れ、その感謝と同情の温かい波は再び彼の胸に打ち返すのである。そして彼の若き、青春の、燃える様な憧憬の心と、生長の欲望は静かにその芸術家の落着きと、愛の中に抱かれるのである。彼は此の時真に生活の幸福を感じ、未来の彼を祝福する。彼は自己に生甲斐を感じる。そして凡ての苦痛に対つて彼の双手を上げて突入する勇気を盛り返す。此の-high 喜悅に於て、そして此の真理を愛する魂を把持して放たざる気魄に於て、彼はあらゆる物質を打ち棄て、も惜しまないであらう。彼は若い。そして彼の未来は遠い。彼は幻の様な未来の中に幾多の彼の姿を見る。そしてそれは限られざるが故に輝

ける希望であり、幸福である。彼に向つてその未来が、明確に想像の中に示顯しないと云ふ事は恵みである。創造のそして生活の凡ての自由が現在の彼に許されて居るからである。彼は若くして純なるが故に幸福である。そして如何にもして生きんとする魂を有つが故に幸福である。そしてその生活に伴侶のある事に於て更に幸福である。それは取りも直さず彼を慰め、彼を力づける真理を慾する魂であるからである。

人は多くの場合に於て彼等が真に純粹であると云ふ事は難い。そして真理を愛する者であると云ふ事は難い。彼等は何かの原因でそう思ふ事、そしてそうある事を妨げられて居るからである。それは多く彼等が社会的訓練の洗礼を受け、そしてその濁れる空気の中にあつてその汚濁を知らない処から来る。民族的偏執。伝統。社交。誤れる教育。

真理を求むるためには、そして真理に対して邁進するためには人はあらゆる偏見を捨てなければならぬ。若しくは彼は甦らなければならぬ。併しそれは多数民衆にとつては至難の業である。只、少数の者のみそのために戦ふ。彼等の戦ひが、その戦ひの生涯が不幸なる民衆の中に真理に向つての憧憬の念を植つけ、悩めるものを慰め能ふが故にそ偉大なる事業である。天才者は民衆の奥底にひそむ魂の顕現である。そして彼は人類それ自身の姿である。彼の気

息は人類の氣息である。彼の叫び、彼の怒り、彼の恐れ、彼の涙、彼の喜悅、彼の愛は共に直ちに人類のそれらである。併し民衆はそれを知らない。国家はそれを知らない。現世はそれを知らない。それがために彼の生涯は悲壯である。そして彼の受くべき迫害は酷烈である。多くの天才者の一生がそうであつた。そして彼が人生を愛するが故に人生の上に瀰漫せる虚偽を憎む事も甚だしい。彼にとつて人生はよし憎悪的とならうとも決して嫌悪的とはなり得ない。そしてその憎悪も愛する処から止むを得ずして発するそれである。愛は一の真理である。民衆を愛せんとする意志と、真理を求めんとする意志とが矛盾し相剋する処に彼の悲劇は生れる。彼は没落と高翔の二途に痛ましき争ひを経験する。

達雄は斯かる悲劇の一生を通過して輝ける永遠の愛に到つた幾多の天才を知つて居た。そしてそうなる事が彼の理想であつた。その理想を生かす方便として彼は創作の形式をとる事が自分に適して居る事を知つて居た。そして殊にそれが音楽に於てよりも、絵画に於てよりも、彫刻に於てよりも、文学に於て自分に適當して居る事を知つて居た。彼は文学の作家にならうとして居た。併しそこには常に多くの人々の場合に起るやうな故障があつた。それは彼の両親の反対であつた。殊に彼の父の極端な反対であつた。彼はそこに悲しむべき親子の意志の

相反を見た。そして悲しむべき運命の伏在して居る事を臆げながら感じて居た。

彼の父は商人であつた。幼少の頃から商人の家庭で育てられ、商人氣質がその全てにしみ込んで居た達雄の父にどうして達雄の理想が理解する事が出来やう。父は彼を立派な商人に仕上げる覚悟で居た。そして達雄は父の意志のまゝに商人になるために商業学校に入学して十八の春そこを卒業した。併し此の時既に達雄の内には創作家として立つべき意志が根を張つて居た。彼は父の商業である株式の仲買を嫌つて居た。そして商業と云ふ商業の全てを嫌つて居た。物質的利害に疎く、社交的会話に拙なく、数学的事務に興味を持つて居ない彼に商人たる事の不適当であつたのは当然であつた。その上彼は深く文学を愛して居た。それと同時に商人的根性を侮蔑して居た。彼の内には父の意志と正反対をなすものが年々に根がよく張つて行つた。彼は父の目をぬすみ、時には父に反抗しつゝ読書し、制作する事を続けて居た彼はその事で常に苦しむで居た。併しその苦しみも彼にとつてはどうする事も出来なかつた。彼は自己の眞の慾求を殺してまで父に屈従する事に我慢できなかつた。止むなければ独立する気で彼は居た。彼はやがて来るべき父との激しい争論の後の別離を予想して居た。併し尚そこには多少の余地のある事をも知つて居た。そして事実そこに余地はあつた。彼は廿二

の春或る会社へ事務員として入つた。そして辛ふじて父との衝突を避けて居た。併し彼は元より読書する事も書く事も止めては居なかつた。彼は夕暮れ帰宅するや否や直ちに自分の書齋へ入つた。そして成るべく父とは顔を合さない様にして居た。達雄は何等かの機会があれば会社を止める決心で居た。その時こそ彼がその生家をはなれ、両親と別れる時であつた。何となれば彼の父は彼の遊んで居る様に見える事を元より許さなかつたから。併しそれでも尚未だ彼等の間に幾分の余地はあつた。達雄は今斯かる日々に暮して居る青年の一人であつた。彼は自己の所信を貫くために、その父母と別離した天才の数人かを知つて居た。そして彼等の伝記を読む事によつて、自己に若し強い信念と、良心とがあるならばその苦痛にも堪へて行ける事を学び、力づけられて居た。併し彼にしても出来るならば無理にも斯かる運命に触れ様とは思はなかつた。又併し結果に於て、如何ともする事が出来なければ、即ち彼の取るべき途が別離か、服従かの二筋となるならば、断乎として別離の途をとるの外はないと思つて居た。全ては力の問題だ。それから先は運命だ。今は唯此の覚悟に止めておくの外はないと思つて居た。

彼は窓をあけた。雪は未だチラゝと降つてゐたが風は静まつて居た。対岸の景色は真白だつた。そして碇泊して居る二檣船

も、汽船も、親船も、伝馬も、その表面と云ふ表面に白い雪をのせて居た。その中を隅田川は寂しく流れて居る。静かに。静かに……

河の面は夜の様にシンとして居た。一艘の動く船も見えなかつた。その中を丁度音なき音楽の様に雪は降つて居る。高い天空から無数の白片が或るリズムをなして尽くる時なく。そして広い水面に落ちては消える。

此の時彼の心を過ぎて行く考へは何であつたらうか。それは恋する心に似たものであつた。或る詩人の心に静かに忍びよつて、優しく彼を抱擁する形容し難い感情であつた。それはセンチメントであつた一つ一つすべつて行く過ぎた日の追懐であつた。掌にのせれば溶け去る果敢ない恋の記憶であつた。やがて来る恋の予感であつた。遠くに煙る未来であつた。それは夕べの野にたゆたふ晩鐘の余韻であつた。牧笛であつた。総て力に於て弱く、尚且人の心を魅する女性的感情のとりとめもない雰囲気であつた。達雄はそれを確かには意識する事なしに此の雰囲気の中にひたつて居た。そして静かに、身を動かさせば瞬時に破れたる様な微妙な世界にその思ひを漂はせて居た。

「自分は今独りである、独りである」と云ふ事の如何に自由であらう。自分にとつてその思念を煩はす事は一つと雖もないのである。自分は自分一箇の絶対の主権者であ

る。そしてあらゆる未来は自分に向つて解放されて居る。愛も創作も、凡ては自分のものである。閉ざれざる天空は自分の頭上に開けて居る。そして此の想像の翼を駆つて無際限の空間に飛翔する事の喜ばしさよ。あゝ自分は今独りである。そして自分一箇の世界に於て君主である。」

併し彼の此の考へは彼が未来を知らない事によつて幸福であつた。痛ましき幻滅がやがて来る現実の相を彼に示さない事によつて幸福であり得た。斯くて未来が彼の前に真にその姿を現はす時、彼は初めて粉碎せられたる夢想を知る。そして彼はその運命の手の下に喘ぐ。併し彼に若し忍苦と不屈の精神と力さへあれば、その苦惨によつて尚更彼は鍛へられる事が出来る。運命の鉄床の上にあつて彼は最もよき自己を鍛へ出されると共に、その室に於て益々堅固に、益々偉大になる事が出来る。それは悲痛であると同時に喜悅である。そこに天才と凡人との大なる懸隔を見る。

併し誰か未来の汝を知らう。そして凡人ですらもその未来を知らざるが故に希望を持ち得るのである。併し偉大なるものゝみ彼が現在の内に未来の一部を予想し得る。とは云へ達雄にとつて尚未だ未来は茫漠たるものであつた。彼はたゞ如何なる運命にも彼がうくべき幾多の試練の度毎に彼自身のものにする事が出来るものであつた。

とりとめもない夢想から醒めて、彼は窓

をしめた。その時雪は漸くやみかゝつて居た。そして冬の夜は早くも来た、彼は電灯をつけて机の前に座つた。彼は何とない喜悅に包まれて居た。そして此の喜悅を失はない為めに、「F」という新刊の雑誌をひろげた。そこには彼が今日行つた展覧会の画家達の感想や翻訳が載せられて居た。元よりT……のものもあつた。彼はそれを熱心に読みにかゝつた。彼はT……の翻訳を読んで居た。初めはその主人公に同感しつゝ熱心に読む事が出来た。併し読むにつれて彼は外の事を考へて居た。彼の頭は彼の考への中に働いて行つた。彼は何を讀んであるかも意識する事なしに唯、或る力の彼の内に漲る事を感じて居た。それは唯、力と謂ふよりも寧ろ創作慾であつた。更に寧ろ、彼が創作の前に必ず感じる一の渾沌たるコンポジションであつた。形なき大なる形であつた。彼はそれを統一し、その中心を掴めばいゝのだ。併し彼が此の渾沌たるものゝ出口を見出す事はむづかしかつた。それは快い苦痛であつた。そしてもどかしい喜悅であつた。鬼事戯であつた。彼はいつかはその流れの出口を見出す。それは適當の時期、即ちその水量が終に堤を破つて奔溢する時である。彼はそれまで待つ事に産気づいた女の苦痛と焦燥と期待とを感じて居た。

その創作乃至感想を発表する為めに達雄は彼が勤めている会社の中で数人の友達と

回覧雑誌をやつて居た。その同人は会社の中で最も彼の親しくして居る友達であつた。彼等はその公けの仕事の上からよりも寧ろ此の創作のために堅く手を握り合つて居た。そして事実彼が最も文学に就て理解あり智識をも持つて居た。そして当然の結果として彼は同人等の頭株であつた。彼等は毎月一回宛その創作、感想を出し合つては回覧雑誌にとちて居た。彼等は年齢に於て若くとも、その真摯な態度に於て活字を用ふる本職文士を軽蔑する程の自信を持つて居た。彼等は始終元氣よく話し合い、互いに刺戟し合つて居た。そして彼等の最後の目的も等しかつた。

達雄は今彼の内に群る此の渾沌たるものを小説の形式によつて表現しやうか、脚本の形式をかりやうかと様々に考へた。そして幾度かその計画を裏返しては最もよき方法で表現する事に頭を悩ませた。併し彼には未だその渾沌が熟し切らない為めに此の二様の形式の誘惑の間を際限もなく歩き廻つた。

彼はたうとうたまらなくなつた。その歯痒ゆきにたまらなくなつて立上つた。

「どつちだつていゝんだ。どつちにしても是がものになりさへすれば文句はないんだ。そして結局ものになるに極つて居る。時が来る。そうすれば内にあるものは自然内から突き破つてほとばしつて来るのだ。割れて来るのだ。それまで待て。それ迄待てば

いゝのだ」。

彼は尚部屋の中を歩きまはった。昂奮し切つて居た。併しその昂奮の唯中に彼の頭の中を明日来るかも知れないT……の返事の手紙の事がちらりと過ぎた。彼は又気が変つた。そして急に障子をあけて河の彼方彼の家のある方を見た。雪は止んで居た。併し風は寒かつた。その冷たい風が彼の熱した頭には快く感じられた。闇の中にほの白い雪景色が見えた。彼はなつかしさに打たれた。そして長い間右手の暗い空の下灯火のまばらに輝いて居る月島の方角を見つめてぼんやりと窓によつて立つて居た。

(未完)

雑誌「エゴ」第四卷一号

大正五年一月

駒込林町の高村光太郎のアトリエ（戦災で焼失）の前で。尾崎喜八の家族と光太郎（後列）。

昭和7年1月。尾崎喜八撮影



## I 雑誌『エゴ』

尾崎さんにとって高村光太郎との出会いほど、必然的で意志的で、その後の生涯に実にさまざまな形で深く関わった場合はなかったでしょう。多くはこの敬愛する先人の存在に励まされ、おそらく時に反発しながらその資質を研いで、尾崎さんはいちぢにより純粹に尾崎さんの世界を紡いだのでした。遙かに後から歩き始めた世代には、その風景は羨望をかきたてるほど美しく感じられます。

尾崎さんは高村さんとの出会いについて、様々な機会に繰り返し書いています。大筋をたどれば、それは前号に全文が掲載された小説「愛と創作」に始まり、時を隔てた回想、昭和六年の「其頃」につながり、高村さん没後の追悼文「初めて会った日の高村さん」（昭和31・6『新女苑』）や、創文社から出る『尾崎喜八詩文集』を記念して詩誌『歷程』が編んだ「尾崎喜八特集」の、尾崎さん自身による「叙述的略年譜（二）」（昭和34・3）に続きます。この年譜は十月

に刊行された詩文集3『花咲ける孤独』の「略年譜」（以下「年譜」と呼ぶことにします）で完成し、その昭和二年までの叙述がほとんどそのまま、最後の著書『音楽への愛と感謝』（昭和8・8 新潮社）の最初の章「生い立ちと音楽」を構成するのです。

しかしそれらの文章は幾つかの点で微妙な違いを持ちます。その相違も含めて、むしろ尾崎さんをその時々には捕えた心理的な真実こそ大切なので、客観的な事実の検証にどれ程の意味があるのかためられますが、まずは虚構のなかにしろ、当初の感動を最も色濃く保存するに違いはない、出会いにいちばん近い時点で書かれた小説「愛と創作」を辿りながら、詮索を始めてみようと思います。

小説が発表された雑誌『エゴ』は、大正二年十月に千家元麿を編集人として日本洋画協会（あとでエゴ社に変わる）から発行された、『白樺』を取り巻く初期の雑誌の一つでした。同じ北山清太郎の日本洋画協会が六号まで発行していた『フェウザン』と、三号まで出ていた千家らの『テラコッタ』が合併し、その「若い数字を合わせて」千家を編集人とする『生活』九号になった時（おかしな計算ですが）、『テラコッタ』同人の千家や佐藤惣之助、成田泰次郎らによつてそれとは別に発行された雑誌でした。大正三年三月には岸田劉生が、四月には武

者小路実篤や長与善郎が登場、長与のロマン・ロラン「ミケランジェロ評伝」が連載され始めます。尾崎さんの「愛と創作」が発表されたのはその最終号、レンブラントを挿絵とする第四巻一号（大正五年一月）で、自らの心の遍歴、その愛と創作について次第に流域を広げる大河を思い描いたに違いないこの小説は、結局その源泉、画家への熱烈な心情の告白だけに終わりました。

三歳年上の恋人塚田隆子との恋愛から父と義絶し、家を出、勤めもやめてこの小説を執筆した前後の事情を、尾崎さんは「年譜」の大正五年の項にこう書いています。

長与善郎氏の厚意でしばらくその赤坂の家に寄宿している間に、当然『白樺』の同人やその傍系の多くの人達と知るようになった。みんな若くて芸術意欲に燃え、息苦しいほどの空気が渦巻いていた。その中には『エゴ』という雑誌の中心人物、愛情に脆くて熱烈でくしゃくしゃになった千家元麿がいた。しだいにデューラー風な画風に移りつつあった傲岸不屈な岸田劉生もいた。私より一つくらい年下で、盛んにゴッホの手紙や後期印象派関係の本などを翻訳していた才人木村莊八もいた。

椿貞雄がい、近藤経一がい、道は違うがこの一群の空気を伶俐な澄んだ好奇の眼で見ていた学習院の生徒

松方三郎もいた。ひとり高村光太郎は、離群癖というか党与の雰囲気を感じたか、清涼な駒込のアトリエで粘土をつくね、のみを握り、静かにロダンの言葉の翻訳に専念していた。旋回する星雲系と遠く光る一つの星。私の心はこの間を微妙に往復した。

## II 「愛と創作」

（此の一篇を長与善郎兄並に我が隆子に）の献辞を持つ「愛と創作」は、若き主人公達雄が観る或る絵画展覧会場の情景から始まります。暖房が二月の雪ふりしきる戸外の冷気を遮って、静かな室内には四、五人の観客がいるに過ぎません。しかし並べられた作品は強く達雄の共感をそそります。

そこには官設展覧会に見るやうな死物の混乱はなかった。生き生きした生命の凝視があった。呼吸をのむだ気魄があった。真摯な空気が見る人の胸を圧した。その圧迫する精神は真に充実した生活の痛い快感であった。ある森厳さが見る者の心に破裂し切らぬ感情の苦しさを与へた。叫ぶ事の出来ない興奮が此の静けさの内に音もなく渦巻く生命の流れを渦巻かせて居た。……それは反逆であった。古きもの、墮落したもの、そして芸術の仮面を以て日本の絵画



界に跳梁する者に対する反逆であつた。

百枚にあまるそれらの作品はわずか五人の芸術家の手になるもので、その内三人の制作はかつて二度ほどみたことがありましたが、その充実しきつた制作の進歩に驚きます。作家Dの肖像画の前では「是こそ真の肖像画だ。」と感じながら、この画家の性格のなかにある寒いほどの厳肅さを見、重い溶け入りがたい息苦しさを感ずます。しかし次に見たTの十数枚の画布は、殆どそれと対極をなすように、厳しさのなかにも暖かい色彩の豊かさを持ち、その中の山岳を描いた一枚を見るや否や、達雄は「これだ」と直感します。「これこそ今の自分の欲しているものだ。この人こそ自分の同胞だ。この筆触、この温かい色彩こそは自分の欲していたすべだ。」と思います。

もとより「愛と創作」は気負いに満ちた最初の長編といつてもいい小説で、当然のことながらさまざまなフィクションを含みます。しかし描かれた状況から見ても、この展覧会が大正二年十月十六日から二十二日まで、神田三崎町二丁目十番地のヅキナス倶楽部で開催された、第一回生活社主催油絵展覧会を下敷きに行っていることは疑いありません。

神田一帯はこの年二月二十日午前二時すぎ、同じ三崎町二丁目九番地の東京歯科学校付近から出火して書店街に延焼、六、七

十戸の新古書籍店を焼きました。三省堂の本館は残りましたが、尾崎さんが勤めていたその器械標本部は全焼します。京華商業学校を卒業して勤めた中井銀行をやめ、明治四十四年、数え年で二十歳の尾崎さんが就職した三省堂器械標本部は明治四十一年に創設された部署ですが、その不振が、百科大辞典刊行のつまづきと共に、大正元年十月の三省堂破産事件の要因ともなっていたのです。尾崎さんにとって文学と科学を結びつける大事な意味を持ち、この時期に高橋元吉のような生涯の友も得た標本部は結局閉鎖され、尾崎さんは三省堂を退職しました。

高橋元吉は尾崎さんより一歳年下ですが、明治四十三年、群馬県立前橋中学校を卒業した後、すぐに三省堂器械標本部に入社しました。明治四十五年には帰郷し、前橋市の実家煥乎堂書店で店員として働くことになるのですが、三省堂への就職は、東京での修行のつもりもあつたのかもしれませんが、平成明治四十五年に帰郷したというのは、平成三年に煥乎堂から出た元吉の選詩集『空じゆう虹』に添えられた「高橋元吉年譜」によるものですが、元吉からの聞き書による村上光彦の証言では

高橋さんは勤めてすぐ、いまでもうノイローゼになり一年も勤めぬうちに故郷に帰ってしまった。そして高橋さんがやめた後に入ってきたの

が、京華商業を出たばかりの尾崎喜八さんだった。尾崎さんは、ほかの店員たちの話から、前任者の高橋さんのことを知り、高橋さんに興味をもった。そんなわけで、高橋さんがその後上京のついでに三省堂によつた機会に、二人は知り合いになった。尾崎さんは知的好奇心のつよい青年だったらしく、たちまちにして高橋さんから多くのものを吸収した。たとえば、そのころ高橋さんは天文学に興味をもっていたのだが、尾崎さんは高橋さんに影響されてたちまち天文学の勉強を始めた。

(昭和58・10「詩人の肖像」)

となつていきます。元吉の話にも若干の思い違いがあり、「煥乎堂書店の店員として」の一件も、商人の父に反発した尾崎さんと通う、入り組んだ経過があるのですが、いまは深入りするのは止めましょう。「高橋元吉年譜」はこの年明治四十五年、十九歳の項にこう付け加えています。「メートルリンクにひかれ、英訳本からの翻訳に没頭する。尾崎喜八との交遊深まる」。メートルリンクへの傾頭は尾崎さんも同じくしたものです。尾崎さんの「年譜」には「彼のすすめで雑誌『白樺』を読みはじめ、文壇の新風や西欧の絵画に心をとらえられるようになった。」とも記されます。のちに元吉が高村さんの大事な詩的交遊圏の一人になつたのは、尾崎さんの誘いがあったから

でしょう。

尾崎さんが、麴町区永楽町二丁目二番地にあった機械等を扱う大手の貿易商社高田商会に入社したのは大正二年暮れのことなので、生活社展が始まった十月にはまだ職を持ちません。

展覧会場兼映画館にするつもりで焼け跡にヴキナス倶楽部を建てたのは、水彩画もよくし、実業家的野心もあつたバリ帰りの木村梁一でした。最初に開催されたのは、十月五日から十四日までの、六月に帰朝したばかりで高村さんともゆかり深い洋画家梅原良三郎の個展で、生活社展はそれに続きました。

「愛と創作」はまず季節を、厳冬二月に設定します。

出品目録によれば一三九点の作品による岡本帰一、岸田劉生、高村光太郎、木村荘八、四人の作家の「生活社展」は、ここでは五人の芸術家の作品展に置き換えます。かつて二度ばかり制作を見た事があるという三人の内、Dは直ちに岸田劉生を、Tは高村さんを連想させ、残りの一人は木村荘八を指すのでしょうか。「二度」が第一回ヒュウザン会展と第二回フユウザン会展を意味するものとすれば、三人は共に最初からの出品者だし、劉生と同じ白馬会の葵橋洋画研究所で学び、のち童画家として知ら

れるようになった岡本帰一も、第二回展には四点の油絵を出しています。

劉生は生活社展に数多くの自画像や肖像を含む五十三点の油絵を出品し、高村さんは油絵二十一点、ペン画三点、彫刻一点を出品しました。高村さんの作品のうち四点の自画像と「胴体」「瓶と鉢」の油彩、彫刻「トルソー」を除けば、すべて恋愛中の長沼智恵子も来て、共に描いた上高地での山岳風景でした。のちに尾崎さんも深く愛するようになったあの上高地です。出品目録からそのリストを写して置きましょう。

油絵「樹木の群」「木立と山」「六  
百岳」「小川と楊」「池」「秋の山」  
「青い山」「曇つた日」「乗鞍」「  
焼岳」「日のあつた山」「林間」  
「楊と山」「木立」「崖の茂み」、  
ペン画「穂高山」「三本鎗」「霞沢  
岳の一部」。

「愛と創作」の主人公は感じます。

そこには大地の盛り上る底知れぬ力があつた。大地の脹れ上がつて出来た山の真実があつた。そしてその禿げた一部には大地の力の断層面が素裸に出て居た。濃い緑に覆はれた部分には見る者をひきつける山岳の寂寥と崇高とがあつた。彼はびつたりと此の画家の心に自分の心を触れ合す様な気がした。彼の内に明確でなかつた溢れる様な青春の感情が、遺憾なく、しかも非常な確かさを持

つて表現されて居ると思つた。そして自分の内に沸騰して居る形を具へない力がしつかりと把握されて居ると思つた。

一枚一枚と見て行つて、その画家の自画像の前に立つた時、興奮は極致に達するのです。そして心に叫びます、「同胞だ。そして友達だ。自分はここに自分を抱き上げる手を見る。此の画家こそ自分の友とすべき人だ」と。

その感銘は達雄に、ただちにこの画家に手紙を書こうと決心させます。

彼は文章世界の新年号にT……の住処が他の多くの文士、画家達のとれと共に載せられていた事を知つていた。それで彼は室の一隅に積み上げられた雑誌の堆積の中から文章世界を引出してT……の住処を見出した。「京橋区月島東中通……。」

これは「年譜」に「京橋区本港町にあつて相当手広い回漕問屋。隅田川を背後に鉄砲洲の河岸通りに面した古風な店がままと数棟の倉庫。自家用の棧橋と外洋の航海にたえる二艘の三檣船。多数の雇人と出入りの人々。」と書く、実家と同じ区内にTの住所を置こうとする虚構でしょうか。或いは明治四十三、四年の一時期、日本橋浜町の大川端に下宿していたことのある高村さんへの親しみの表現でしょうか。大正二年の『文章世界』新年号には「現代文士録」は無く、光太郎の住所も京橋にはありませ

ん。尾崎さんが執筆にあたって利用出来たかもしれない大正三年四月特別号には「現代文士録」に併せて「現代美術家録」が載っていて、光太郎の名はいくらかニユアンズを変えながらどちらにもあります。光太郎の詩「婚姻の栄誦」が発表された号です。

高村光太郎 彫刻家高村光雲の男。明

治十六年三月、東京市下谷区西町に生る。東京美術学校彫刻科出身。後、欧米に在留したこと数年。多くの詩作、翻訳、及び美術に関する批評等がある。現住所、本郷区駒込林町二十五番地。（「現代文士録」）

明治十六年三月、東京市に生る。

明治三十五年東京美術学校木彫科卒業。後、欧米に留学した。第一回フューザン会展覧会に油絵数点を出版した。現住所、東京市駒込林町二十五番地。（「現代美術家録」）

小説は、自分の内にTに対する殆ど盲目に近い信仰を感じ、幾度も書き損じた短い手紙を投函したあと、渦巻く思いに興奮した頭の中で、明日にも届くかもしれない返事の事を考えながら、Tが住むという暗い空の下の「灯火のまばらに輝いて居る月島の方角を見つめてぼんやりと窓によつて立つ」達雄の描写で終ります。

この小説が幾つかの虚構によって組み立てられているとしても、その骨組みに肉付

けされ、そこに封じ込められた若き日の尾崎さんの、高村さんへの敬愛に重ねられた、人生に対する熱い思いは、生き生きとして読む者を打ちます。「相変らず熱烈で正しい」（昭和3・1「喩らぬ友」）尾崎喜八がすでにここにいます。

センチメンタリズム。庸劣なるヒューマニタリアニズム。卑しき性欲

描写の為の性欲描写、病的嗜慾を芸術の羅をもて覆へる悪魔主義。誤れる現実主義……併しそれは真の芸術ではない。そして斯の如き邪道に棲息するものは真の芸術家ではない。……彼等の背景に人類はない。人類の運命もない。そして云ふ迄もなく一点の愛と雖もない。

達雄はそれをK・Tに見、H・Iに見、J・Tに見、S・Tに見、R・Nに見、G・Sに見、そして彼等の無数なる追隨者等に見た。

勝手に補えば、K・Tは田山花袋、H・Iは岩野泡鳴、J・Tは谷崎潤一郎、S・Tは徳田秋声、R・Nは中沢臨川、G・Sは相馬御風などでしょうか。

Tへの手紙のなかで「文壇に於て私は『S』の二三人達を尊敬して居ます。併し絵画界にあなた方の居る事を今日程強くありがたく思つた事はありませんでした。……殊にあなたの絵を見た時、同属のなかの同属である事を感じました。今でも今日の昂奮が私の中に漲って居ます。」と告白す

る『S』は『白樺』を指すに相違なく、三人には武者小路や志賀や長与、或いは千代らが意識されているに違いありません。

手紙を書き終わったあと、達雄は『F』という新刊雑誌をひろげます。

そこには彼が今日行った展覧会の画家達の感想や翻訳が載せられて居た。元よりT……のものもあつた。

彼はそれを熱心に読みにかかった。彼はT……の翻訳を読んで居た。初めはその主人公に同感しつつ熱心に読むことが出来た。併し読むにつれて彼は外の事を考へていた。彼の頭は彼の考への中に働いて行つた。彼は何を読んでもあるかも意識する事なしに唯、或る力の彼の内に漲る事を感じて居た。それは唯、力と謂ふよりもむしろ創作慾であつた。

『F』の頭文字を持つ美術雑誌は『フューザン』（"FUSION"）しかありません。新しい美術運動をめざす芸術家たち、斎藤与里を編集人とし、与里や光太郎、劉生、荘八、万鉄五郎らが中心となつて大正元年十一月に創刊されたB5判の美術雑誌『ヒューザン』は、三号から誌名を「フューザン」に改め、判形も菊判になりましたが、十月に最初の展覧会を持ったフューザン会の機関誌でもありました。しかし大正二年五月、展覧会に対する意見の相違から会は解散、『フューザン』は六月一日発行の第六号で

終わり、高村さん達は新たに生活社を結成しました。『フェウザン』が『テラコッタ』と合流して『生活』(“L'ARTISTE”)七月号になったことは先にふれました。その『生活』も、しかし八月号で終ります。

だからもし展覧会を、十月の生活社展とすれば、新刊の雑誌は『生活』八月号にならざるを得ず、小説の設定のように二月に遡るとすれば大正二年二月の『フェウザン』第三号ということになります。『フェウザン』『生活』を通じて光太郎が発表したものはロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』第四卷「反逆」冒頭部分の翻訳のみで、しかも前年完結したばかりのこの大河小説の、日本で最初の訳を連載し始めたのは三月十三日に発行された『フェウザン』第四号からでした(三月十三日は奇しくも光太郎の満三十年の誕生日に当たります)。そしてその連載は予告されながら『生活』七月号の第四回でとぎれ、八月号にはこんな「消息」だけが載ります。

暑熱の為に生理的の打撃をうけて今月発表する作の一つもなかつた事を残念に思ふ。私はまだ暑熱にまける。まけなくなる予感随分ある。二三日うちに、しかし山を歩きに行つて九月に東京に帰る。山を歩きたい慾望は随分前からあつたので、今度山の中にはいつたら堪らないと思ふ。私は今大変な時に居る。非常な

時に居る。二三日したら山へ行く。山を歩く。

(七月十五日夜光太郎)

光太郎を促しているのは、あの最初の生活社展のための制作です。

### III 「ジャン・クリストフ」

達雄が見た雑誌が「愛と創作」から特定できないとすれば、ここでも「年譜」の助けを借りなければなりません。

大正二年(二十一歳)……七月に創刊された雑誌『生活』で高村光太郎の訳になる「ジャン・クリストフ」の一節を読んで感激し、居ても立ってもいられないような気持になる。そして早速ギルバート・キャナン英訳の「ジョン・クリストファー」三巻を丸善から買つて来て夢中になつて読みはじめた。同時に自分の最も敬服しているトルストイ伝の著者ロメイソ・ローランドが、即ちこの偉大な小説「クリストフ」の作者ロマン・ローランその人である事を知つて狂喜した。更にロンドンダックウオース社発行の美術家伝記叢書で同じローランの「ミレー」を読み、別の粗悪な英訳書であるすばらしい「ベートーヴェン」も読んだ。

かつての時代を噛みしめるように回想し

た同じような記述は、ロマン・ローランへの「渝らぬ感謝」を述べた『現代世界文学全集』の月報6(昭和8・4新潮社)にもあります。(『尾崎喜八研究』3収録)

其頃漸く魂を打込み始めたトルストイやロマン・ローランへの熱烈な傾倒、わけてもその「復活」と「ジャン・クリストフ」とは、その私がおもはや二つとない心の糧とも泉とも火とも鞭とも信じながら、飽かず練りかへす聖書であつた。

しかし「復活」はしばらく措いて「ジャン・クリストフ」! 私は其の一小部分を雑誌「フェウザン」の改題した「生活」で初めて読んだのだった。第四卷「反逆」の第一章「流砂」の冒頭の数頁で、これを二回か三回に亘つて高村光太郎さんが翻訳し発表した。一小部分とはいへ真におどろくべきものだった。その日本語は正に翻訳の亀鑑とも言ふべきであり、作そのものは魂を揺すぶつて精神を奮い立たしめること全く倫を絶するていの文学であつた。万軍に匹敵する味方といふ言葉があるが、日本でいまだ殆ど知られず沉んや重視もされなかつた此の作者の此の作の、全く小さな断片的な紹介が、詩とヒューマニティーとヒロイズムとの渾然とした文学に、あてもなく鬱勃たる憧れを燃やしてゐた少数の

若く純粹な魂をして、「正にこれだつた！ これさへあれば！」と叫びしめたのである。それは文字どほり「叛逆」であり、脱却であり、平凡と卑小とに重かつた夜を吹きあける脈々たる朝風であり、芸術的独善主義と懦弱とを叩きおこしてみせられた新たな可能世界の目も遙かな展望であつた。

「年譜」には『フューザン』の名は現れませんが、光太郎との出会いを最初に回想した「其頃を語る——詩壇の思い出」（昭和6・二『詩人時代』、のち「其頃」として『詩人の風土』に納める。前号「中年のおもかげ」参照）には、「高村君の名がでてゐるので買ひ損ふ事の無かつた」『フューザン』にふれ、ここでも

「フューザン」が「生活」となり、既に出てゐた「白樺」の武者小路君等が同人に加はつた頃の前衛的精神には、私達をも奮ひ立たすものがあつた。しかし何より忘れてならないのは、高村君がその「生活」へロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」の「叛逆」の一節を訳したことである。これこそ私にとつて真に決定的な力だつた。これこそ其瞬間から私の運命に一転機を促す物だつた。ああ芸術！ 一生を捧げるに価する芸術！ たうとう私はお前を見出した！ 芸術は何といいか！ 抑も斯の如く生

きる事は何と男らしい事か！ 私は真に涙をながした。私は断然文学に志した。

今日私の精神の父であるロマン・ロランの名を初めて私に知らせた人。それは我が高村光太郎君であつた。

私は母にねだつて「ジャン・クリストフ」の英訳四巻を、実に「生活」を読んだ翌日、丸善で買つて酔ふがやうに帰つて来た。

と書き、「愛と創作」の絵画作品に代わつて、『生活』で初めて読んだ「ジャン・クリストフ」が強調されます。遙かに時を隔てて再現された記憶には、時に避けがたい思い違いもあるでしょう。例えば最後の「クリストフ」訳が載つた『生活』のはじめの号に、武者小路が同人に加わつたというのは、同じ号の「消息」の武者小路が書いた次の一節とはニュアンスを異にします。

自分は君達の雑誌に毎号何か書かしてもらいたい気がするけれども、自分は今の所全力を「白樺」につくしたく思つてゐる。しかし君達と話したいことがあつたら何かかいて出して戴くかも知れない。何しろ今の時代に君達が生きてゆくことはこの上もなく面白いことゝ思つてゐる。

自分は何時まで君達のよき友でありたいと思つてゐる。しかし未来のことは誰か知らう。お互いに行く

所まで行くより仕方がない。希望の多い「生活」の誕生をくり返しくり返し祝福する。

（五月二十六日朝、無車）

これらの回想は、後年にいたるまで雑誌『生活』の印象が強かつたことを裏書きしますが、たとえ最初の「ジャン・クリストフ」を『生活』で読んだとしても、『フューザン』旧号に遡ることは、たやすいことでした。

「年譜」の明治四十五年の項に「ロメイソン・ローランドという人のトルストイ評伝があつて、この本に最も深く心を打たれる。一方『白樺』もバックナンバーを揃えて読み、武者小路や志賀のものを特に愛した。」と記す、尾崎さんが読んだロランの英訳『トルストイ』は、

“Tolstoy” Translated By Bernard Miall. Fisher Unwin, London, 1911.

翌年の項に現れるロランの英訳書はそれぞれ

“Jean Christophe” Translated by Gilbert Cannan. Heinemann, London, 1910-1913.

“Millet” Translated By Clementina Black. Duckworth: The Popular Library of Art. London, 1902.  
“Beethoven” Translated By F. Rothwell, Drane, London, 1907

でした。

回り道をしました。ここでこんなにも尾崎さんを感じさせた光太郎の訳文の、ほんのわずかな部分でも書き写して置かなければなりません。まず『フェウザン』第四号第一回のその冒頭、

脱却！ 彼は脱却を感じたのだ：他人からの、又彼自身からの脱却を感じたのだ。一年以来彼が拘束されてゐた情熱パッションの網は、俄かに破れた。

どうして。彼は其に就いて何も知らぬ。網の目が彼の身の圧力に負けたのだ。其は、健やかな自然が、過ぎ去つた年の死んだ被服、息をつまらせてゐた古い魂を猛烈に引き裂く一種の成長の劇変期であつた。……

彼はこの苦痛の事を思つてゐなかつた。其の中から脱け出て来た昔の苦痛の事を思つてゐた。彼は冬の空、雪に被マチはれた市、歩き悩んでゐる人々を見た。彼は自分の周囲を見、自分の中を見た。何者も最早や彼を何者にも縛りつけて居なかつた。彼は独りであつた……独りで。独りである事、自分である事の幸福さよ。其の鎖から、其の記憶の呵責から、其の愛する顔又憎む顔の幻覚から脱れた事の幸福さよとうとう、生の餌食とならず、自分自身の主君となつて

生きる事の幸福さよ……

ヴェルレエヌの「告白録」を訳そうとして、それが「あまりに痛ましくて私を悲しませる事がげし過ぎる」のでやめ、サン・オギュスタンの「コンフェッション」を訳し始め、「恐ろしい気持ちと自分の経験以外の事柄、心理がありすぎる」としてまた棄て、二十一日の夕方、間近に迫つた締切の二月二十五日までに「クリストフ」の訳稿を送る事を約束した高村さんは、二十二日再び編集者に書き送ります。

私は今クリストフを訳しながら激昂してゐます。クリストフの心理状態をよく了解出来るからだとおもひます。私は此を訳す事を喜んでゐます。其の純仏蘭西な魂も私を躍らせ

次は第二回の終りの二三行とそれに続く第三回の初め

俄然、電光が来た！  
クリストフは喜びに叫喚した。

喜悅。猛烈な喜悅。現在未来のあらゆるものを照り輝かす太陽。創造の神々しい喜悅。創造の外に喜悅はない。其の外の物はすべて影である。生に關係のない、地上に漂ふ影である。あらゆる生の喜悅は創造の喜悅である。たつた一つの烈火から出た力に燃えてゐる――愛、天才、活動。

此の大きな竈の周囲に位置を求め得ない者さへも――即ち野心深い者、利己的な者、又生殖力のない放埒者さへも――此の白熱の反射に熱せられないでは居られない。肉体界の創造にせよ、精霊界の創造にせよ、其は体軀ルの牢獄の破獄である。生の嵐の中の跳蹴である。「在る者」である。創造こそは死の殺戮である。

最後は最終回、『生活』に載つた第四回の始め近く

すべての人種、すべての芸術はそれぞれに虚偽を有つてゐる。社会はヴェレエヌ真実から養われる事少く、イボクリン偽善から養われる事が多い。人間の心は脆弱である。純白な真実に応ずるのが難い。其の宗教、道徳、国家、詩人、芸術家が其の真実を虚偽に包んで示さねばならなかつた。此等の虚偽は各人種の心に相応じて互いに異なつてゐる。民衆相互の領解を斯くも困難にせしめ、相互の誤解を斯くも容易にせしめるのは此等の虚偽である。真実は如何なる処でも同じである。が、各民衆は各民衆の虚偽を有つてゐる。此を彼等は理想主義と称してゐる。すべての人は生より死に至まで其を呼吸する。此こそ彼等にとつて其の生活の条件となるので

ある。ただ少数の天才のみ英雄的の激動の後に其を振りすて、彼等の思想の自由な天地の中に独り立つてある。

これだけの部分を見ても、「愛と創作」の冒頭の雪の設定、「反逆」の語、思想や文体が、光太郎訳「ジャン・クリストフ」の深い影響下にあることを感じ取ることができます。

#### IV 「出会い」の時

この宿命的な出会いについて、正面から触れずに来たもう一つの問題があります。生活社展にせよ『生活』にせよ、それは大正二年後半の出来事です。しかし「年譜」明治四十五年の項にはこう記録されています。

徴兵検査に丙種で不合格。この年高村光太郎を本郷駒込のアトリエに初めて訪問し、文学志望の気持をうちあげて忠言をうける。

しかしその「出会い」の「時」は、尾崎さんの長い親愛の彼方に没して、いつか確かな資料や記憶が失われていたように見えます。

前号「中年のおもかげ」の(1)を構成する昭和六年の回想「其頃を語る」では漠然と「大正二年から三年、もう私は時々駒込の高村君を尋ねてみた。」と書き、(2)

の部分となった「初めて会った日の高村さん」(昭和6・6『新女苑』のち「初めて見たアトリエ」として「私の衆讃歌」へ)では「今日こそ晴れて高村光太郎その人に会うことのできる嬉しさ恐ろしさにわくわくしながら、私の行ったのは明治が大正に改まった年かその翌年の、たしか七月の事だったと思う。」と書きます。「翌年の」つまり大正二年の七月のこととすれば、それは『生活』の最初の号がでた直後ということになります。

しかし昭和四十一年十月に『春秋』に書いた「高村さんとの出会いの初め」(のち「片思いの頃」として「私の衆讃歌」へ)ではいくらか曖昧さを残しながら、再び「私が初めて駒込の新しいアトリエに高村さんを訪れたのが満二十歳の時だったから、以上はすべて明治四十三年から四十五年までの間、高村さんが満二十七歳から二十九歳ぐらいの頃である。」と変るのです。

「今日こそ晴れて」と尾崎さんが書いたのは、もちろん先にも述べた久しい思い入れがあるからです。具体的には「其頃の思ひ出」や「高村さんとの出会いの初め」にその文学への出発も含めて詳しく書き留められています。尾崎さんはそこで

私はこの清潔で星のように光った五文字の署名を、当時の文芸雑誌や美術雑誌やいろいろの新聞紙上で見た。と言うよりも、この名の人が書いていけばこそそういう雑誌や新聞

を買ったり読んだりしたのだった。

そして言うまでもなくその文章に心を奪われた。誰一人あんな文章を書く人はいなかったし、誰一人あのように知的で男らしく孤高でしかも何うような文体の駆使者はいなかった。たとえば

として散文「粘土と画布」(明治4・4『文章世界』)、「出さずにしまった手紙の一束」(明治6・7『スバル』)、「緑色の太陽」(明治6・4『スバル』)、『伊太利亜遍歴』(明治6・7『スバル』)などを挙げています。

「これこそ最初の何者かであった。私はあの時のおのが身顛ひを今でも覚えてゐる。」とする自由劇場の第一回公演「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」が上演されたのは明治四十二年十一月、「それはもうエクゾチズムの関与して来る世界では無かった。それは安易な心、良心の麻痺、惰性的な生活への天の雷火だった。私の理想主義への火が此時から小さく育まれた」とするトルストイの内田魯庵訳『復活』後編は明治四十三年一月、丸善から出ました。

光太郎が『スバル』に「失われたるモナリザ」「根付の国」などを発表して、新たな詩人として出発した明治四十四年一月、『文章世界』に「髭の豊かな、ゴム合羽を着た半身の」その写真が載ります。写真を見た直後、東京の夜にその顔に三度出会いました。一度は銀座のカフェ プランタン

の紗のカーテンのむこうで、食卓に向かつてランプの一人占いをしている、かすりの着物に縞の袴の光太郎に。二度目は囊の上野広小路で、冬だというのに筒袖の単衣に袴。傘もささずに古い麦藁帽子をかぶつて、まるで疾風のように通り過ぎる光太郎に。そして三度目は神田小川町の電車通りで。「中年のおもかげ」とはすこし表現が違うので、「片思いの頃」から三回目の出会いの部分を写してみよう。

そのすぐ近くの淡路町の角に、高村さんが令弟道利さんに始めさせた琅玕洞という美術店があった。……その夕暮二人が電車通りですれちがったのは、私とその店から出、高村さんがその店へ行くちようどその時だったに違いない。今度こそ私は勇気をふりしぼって声をかけた。高村さんは立ちどまり、白い眼をして私を見た。私はとっさの思い付きで、自分は芸術を好きで、特にあなたの書かれる物に心酔している男ですが、外国の美術雑誌では何というのが善いでしょうかというような事をたずねた。すると「国内で手に入るものならステイデュエーが善いかも知れません。英語です」。そう言い捨てるのと振り向きもせずさつさと琅玕洞のほうへ行ってしまった。初めて聴いた高村光太郎の声だった。……私はそれだけで感動し、別れてから一人

顔を赤らめ汗をかいた。

高村さんに即して言えば、その年四月、新しい美術運動の拠点として時代に先駆けて始めた琅玕洞は大変な赤字で閉鎖し、企てた北海道移住も挫折。頽唐の日々のなかで出会った長沼智恵子との恋愛。明治四十五年六月には新しいアトリエが完成します。それから大正に改元された十月、ヒュウザン会の展覧会が開かれ、雑誌『ヒュウザン』が出、間もなく『フユウザン』に変わり、大正二年の生活社、雑誌『生活』が生まれます。尾崎さんが最初に訪問したのが新しいアトリエ（昭和2・6「初めて会った日の高村さん」）だったとすれば、その時期は明治四十五年七月から翌年にかけて、いつとはにわか定めるわけにはいきません。尾崎さんが「たしか七月の事だったと思う」と書く七月が明治四十五年七月とすればアトリエ完成直後。大正二年七月とすれば高地上地に出発する直前。「愛と創作」が暗示する生活社展のあと、最初の手紙を書いてから間もない時期とすれば、それは大正二年の秋にまで下ることになるでしょう。

大正三年十月、最初の詩集『道程』が出来た時、勤めていた高田商会の玄関に高村さんがそれをとどけた挿話を、尾崎さんはしばしば書いています。とすればその時期には、十年近い年齢差を越えて、共感はずでに深い筈です。高村さんが尾崎さんにおくった『道程』には「ルカ伝」第十章のイ

エスの言葉「無くて叶わぬものは只一つなり。マリアは善きかたを選べり。こは彼より奪うべからざるものなり。」をフランス語で書きつけてあったといえます。大正五年に書かれた「愛と創作」を子細に点検すれば、『道程』味読の跡を随所に見出だす事ができるでしょう。最初の訪問の期日をもぐる詮索は、いまのところそのあたりまでしか届きません。

## I アトリエにて

最初の光太郎アトリエ訪問の状況については『尾崎喜八研究』28号の「中年のおもかげ」（2）にまかせ、ただそこで、原形「初めて会った日の高村さん」（のち「初めて見たアトリエ」）に補った高村さんの言葉だけを記録して置きましょう。終始袴の膝に端然と両手を置き、「結局自分は文学で身を立てたい」という尾崎さんの話を聴いていた高村さんは答えます。

芸術の道がどんなに険しく、芸術



の生活がどんなに困難なものであるかを思えば、むしろ何不足ない実業家の息子として、しかも一人っ子として、両親もそれを期待し君自身もそのための教育をうけた実業の道へ、芸術に対するのと同じ熱情と信念をもつて向かつて行くことを奨めた。しかしもしも今後君のその熱望がいよいよ燃えさかたて、芸術以外の世界ではとうてい生きられないという時が来たら、それこそ君の運命だから喜んでそれに従うがいい。いずれにせよ、何よりも大事なことは、自分の内心の声を聴いて決しておのれを偽らないことだ。……豊かな心と賢い知恵とで、おもむろに君の運命を養い花咲かせるのがいい。

そして高村さんはメーテルリンクに興味を示す尾崎さんに、「『知恵と運命』という深く美しい本のあることを」教えるので、ずっと後で尾崎さんが書いた高橋元吉を偲ぶ文章「若き日の友の姿」(昭和3・4『本の手帖』)で

高橋元吉はわけても柳宗悦に私淑していたので、その影響からこのベルギーの詩人の哲学的著作に心酔し、私をもその渦中に引きこんだ。おそらく互いに高の知れた語学力だったに違いないが、それでも若さと熱意は恐ろしく、一と夏かけて高橋が『知恵と運命』の全巻を、私が『蜜蜂

の生活』や『花の叡智』や『裏庭』の大半を読破した。……その間頻繁にやりとりする手紙のほかには、一年に二度か三度しか会えないような境遇だった。

と記す、そのメーテルリンクです。

大正三年七月二十八日には第一次世界大戦がはじまりました。ロマン・ロランはスイスに止まり、八月二十五日の日記に書き留めます。「わが神よ、わが祖国とわが友らとを救うためならば、私の幸福、幸福のあらゆる機会、私が愛着しているもの、そして私の生命を献げるでしょう」。片山敏彦の『ロマン・ロラン』評伝(昭和12・13・14)芸世が伝えるこの言葉は、どうしたことか後の『日記』(昭和3・7 みすず書房)からは消えています。それはパウロがロマびとに与えた手紙のなかの「もし我が骨肉、同胞、肉による同国人のためになるのなら、私がキリストから引き離されて、のろわれた者となる事さえ願っていたのです」(『ロマ書』9-13)を思いおこさせ、人間存在に深くわだかまる民族愛、国家愛、ひいては自我愛の根強さを暗示して、重く、はるか後の高村さんや尾崎さんにも届きます。ロランはこの日から、あとで高村さんが翻訳することになる詩「平和の祭壇」(Ara Pacis)を書き始めていました。「愛と創作」を書き進めた大正四年には、

尾崎さんは高村さんと智恵子夫人の棲む駒込林町のアトリエで、つねに迎えられる客でした。すでに塚田隆子を愛し初めていた尾崎さんにとつて、西欧の詩や、優れた知性としてのロマン・ロランに導かれた音楽について、高村さんと共に語るのほどに喜びだったことか。高村さんの音楽への熱愛は、例えば明治四十三年一月の『趣味』に発表された「詩歌と音楽」などに見るように、はるか以前に遡ります。

## II 音楽への誘い

雑誌に小説が載った昂奮の余韻も残るある日、高村さんも初めに読んだというロランの『今日の音楽家』(Musiciens d'aujourd'hui, 1908)の出たばかりの英訳本("Musicians of To-day" Translated By Mary Blaiklock. Kegan Paul, Trench, Trubner, London, 1915.)が尾崎さんの手にはいります。そして「渴いた者が泉に出会ったように」始めた翻訳は、直ちに『白樺』誌上を飾るのです。大正五年四、五、六月には「ベルリオツ論」、七月には「フーゴ・ヴォルフ」、九月には「ワグネル」、十月には「リヒアト・シュトラウス」、十一月には「クロード・デュビュッシー」。そしてその年十二月十八日、洛陽堂から「長与善郎君の家庭にありし日の記念のために」

の献辞を添えて、ロマン・ロラン『近代音楽家評伝』が刊行されました。尾崎さんの最初の本です。洛陽堂は大正六年以後白樺社に移るまで、雑誌『白樺』を発行し、何冊もの同人の書物を刊行している出版社でした。

高村さんはその「デュビュッシー」の章を明治四十四年三月号の『太陽』に「クロオドデュビュツシイの歌劇—ペレアス、メリザンド—」として訳出していますが、これこそロランの文章の日本で最初の翻訳でした。

尾崎さんが、同じ年に出了同じ訳者の“Musiciens d'autrefois”を持つていたことも、この本にそこから訳出した「モーツアルト」を加えていることで分かります。

大正五年十一月に高村さんが編んだ『ロダンの言葉』が阿蘭陀書房から刊行されましたが、同じ月の二十七日にエミール・ヴェルハランがルーアンで鉄道事故死し、十二月九日には夏目漱石が四十九歳で亡くなりました。

『白樺』で「ベルリオツ論」となっている最初の評伝は、単行書では「ベルリオ」に改められ、『白樺』の大正六年八月から大正九年十二月まで十八回に渉って連載されたエブリマンズ ライブラリーの Katharine F. Boultk 約篇“The Life of Hector Berlioz—as written by himself in

his Letters and Memories”の翻訳、「ベルリオの手記」でもその表記が踏襲されます。その訂正の理由について尾崎さんは、

今日ではベルリオーズと発音したり書いたりするのが正しいとされている「ファウストの地獄墮ち」や「幻想交響曲」の作者の名を、少数の専門家以外はその名も知られず、いわんやその作品も公には一度も演奏された事のない大正七年から九年にかけての音楽的日本のあの頃、「南フランスの出の人だから、語尾を消してベルリオと言ったほうがいいでしょう」と教えてくれたのは高村さんその人だった。(昭和32・7「思い出(その一)—ラコッチイ・マアチ—」と書いています。

文中の大正七年は五年にまで遡らなければなりません、高村さんはその当初からいつも尾崎さんの翻訳上の疑義の相談相手でした。

尾崎さんと平行するように『白樺』誌上には、高村さんのホイットマン『自選日記』の部分訳(大正6・2〜12)が載り、続いて大正七年一月号の「ロダン追悼付録」から「ロダンの言葉」が始まって、大正八年四月の「第十周年記念号」まで断続して続きます。のち『続ロダンの言葉』の内容をなす訳業です。ロダンは大正六年十一月十七日、七十七年の生涯を閉じました。追悼号には尾崎さんも小説や翻訳と一緒に、「ロ

ダンの死を悼みて」という文章を載せています。

### III ロダンとベルリオーズ

ところで大正九年の高村さんの誕生日、一九二〇年三月十三日の日付を持つ『続ロダンの言葉』の序文に、こんな一節があります。

○「ロダンの手記」の大部分はアメリカで出版されたクラデル女史のロダンの評伝から抜いた。はじめそれを尾崎喜八君と一緒に訳すつもりであたところ、尾崎君は火事の為に御自分の原稿を全部焼かれてしまつて、私の訳だけになつた。いろんな事が思ひ出される。

高村さんがパリで食べ物をきりつめてまで買ったというクラデルのベルギーで出た大冊“August Rodin: L'oeuvre et l'homme”(1908)は有名ですが、これはのちクラデルが編集して、大正六年、1917年にニューヨークの THE CENTURY CO. から英語版で出した“Rodin, the Man and His Art, with leaves and his note-Book”<sup>1)</sup>十月に初版が、翌年八月に再版が出ています。

高村さんは大正七年四月に発行した水野葉舟との冊子『智慧』の第一号に、その本のロダンの手記から「花についてのロダンの言葉」を訳しているので、初版刊行の直

後にすでに入手していたのでしよう。大正七年九月の『白樺』に載った尾崎さんの小説「落ちたる蕾」にも毎日ロダンの翻訳にかかっている主人公が登場し、小泉鉄も六号雑誌でそのロダン訳への期待を表明しています。「ベルリオの手記」と全く重なる時期です。恐らくこの本の三つに分かれる真ん中の部分、「RODIN'S NOTE-BOOK」を高村さんが訳し、前と後ろ「THE CAREER OF RODIN」と「THE WORK OF RODIN」を尾崎さんが分担して叢文閣からでも出版しようと考えたのでしょうか。すべての訳稿が失われた火事というのは、いつたい何時のことだったのでしょうか。「いろんな事が思ひ出される」という言葉の裏には、どんな尾崎さんとの交遊の記憶が畳み込まれているのでしょうか。

その間にも尾崎さんの身边には様々なことが起こりました。大正八年二月の愛人隆子の死と、その後の「時々高村氏を訪ねるほかは人とも会わず、心に荒涼を抱いて歩きまわった」虚脱。十二月の朝鮮銀行入社。京城本店へ赴任して、仲間と回覧雑誌『山脈』などを作ってみても、そこはついに満たされないエリート社会。病気という理由で、年末には東京に舞い戻ります。

東京へ帰るや本郷の西片町に下宿を求め、高村氏とも頻繁に会って一緒にたびたび飲み食いにも出かけ

トローヴェンやベルリオーズの音楽にも感銘を共にし、彼の感化でヴェルアーランの詩を真剣になつて読み、自分でも詩を書きはじめ、その推挙で牛込の叢文閣からベルリオーズの『自伝と書翰』という翻訳書を出すことができ、また伴われて荏原郡平塚村字下蛇窪の静かな田舎に水野葉舟氏を初めてたずねた。そしてここで初めて氏の長女で当時十五歳の実子という娘を見た。大正八年、大正九年のこの二年間、ともすれば自暴自棄に陥りかねない私を常に細かい心づかいで兄のようにみとってくれた高村氏は、まことに救いの大天使であった。

(年譜)

尾崎さんの人生の重大事が凝縮されていますが、ここでは若干の注釈を加えるだけに止どめましょう。

西片町というのは、後に高田博厚が書く森川町の記憶ちがいで、尾崎さんはその前には芝に下宿していました。すぐに関わりがあるので高田の証言を写します。

その頃、尾崎は芝の田村町に下宿していた。彼はマンドリンを弾いており、その先生が株屋に勤めている倉田賢二だった。これは前橋の男で、尾崎の親友だった高橋元吉の細君の兄だった。前橋にいる頃には萩原朔

太郎といっしょにマンドリンを演っていた。倉田の叔父さんに当る山崎という人が日本銀行の料理人頭で、名人だったが腰の低い庶民で、二人の美しい小さな娘がいた。この家に尾崎が下宿していたのである。私もよく訪ねた。尾崎は下の娘をとくに可愛がっており、彼のことだから、山崎の両親に「僕にくれませんか……」と言ったらしく、親の方もその気になっていた。彼は三十歳ちかく、娘の方は十二・三歳だったろうが、親にとって「くれませんか……」というの「嫁にやる」と思っていたようだ。

(「おもいで」昭和五・六『アルバム』  
特集「尾崎喜八」)

大正十年三月から五月まで『白樺』に載せたロランの「コラブルニオン」の訳はその時期の仕事でしょう。

有島武郎の親しい友足助素一の経営する叢文閣は、高村さんの最も信頼する出版社でした。高村さんの『続ロダンの言葉』が大正九年五月にそこから出、尾崎さんのベルリオーズが十二月に出ます。尾崎さんが最初に訳した『音楽家評伝』のなかで、ロマン・ロランが「彼が如何に多くを音楽及び彼自身の生活に就いて書き記し、そして如何に其の奇智と理解とを彼の抜目なき批評及び美しい『メモアル』の内に示したか」

と書き、「彼の『メモアル』は全体として、音楽家によつて曾て書かれた内の最も喜ばしい書物の一つである。」とした、その「メモアル」です。

尾崎さんのこの第二の訳書は高村光太郎、高橋元吉、倉田賢二に捧げられていました。倉田は高田の証言にもあるように、元吉が大正五年十一月に結婚した倉田菊枝の兄で、元吉より二歳年下でした。萩原朔太郎にマンドリンを習い、その倶楽部のメンバーでもあります。北原白秋ともかわりを持ち、元吉に朔太郎を引合わせたのも倉田でした。尾崎さん側からの交遊の記録は見当たりませんが、大正七年には上京して証券会社に勤めていました。自らはしばしば倉田健次と名乗っています。

翌年十二月、復刊『明星』第二号に発表された高村さんの新生を彩る長大な詩「ペルリオの一片」（のち「ラコツチイ マアチ」）は「『ペルリオ自伝と書翰』の訳者わが敬愛する詩人尾崎喜八氏に献ず。」の添書きを持ちますが、後の改作で削られた、終りに近い「ああ、ムツシユウ、ムツシユウ、」で始まるフランス語の部分は、殆ど尾崎さんの訳文と同じ形式を持ち、訳出に高村さんの助言があったことを思わせませう。全訳された高村さんのホイットマンの『自選日記』が同じ叢文閣から刊行されたのは、大正十年九月ですが、序文に「戦争記事や、アメリカ特殊の動植物の記事などには弱つ

た。」と書くその動植物名の調査を、動植物が好きだった尾崎さんが手伝つたという話を、尾崎さん自身から聞いたことがあります。すでに尾崎さんと高村さんともに在る者だったと言つていいでしょう。

水野葉舟や、長女「当時十五歳の実子という娘」後の夫人のことは『資料』3の「尾崎さんと高村さん―聖母子像をめぐつて―」に書きましたから、それに譲ります。

#### IV 詩への出発 高田博厚

高村さんが「わが敬愛する詩人」と書いた大正十年は、尾崎さんがまさしく詩人として出発した年でした。

高田博厚が尾崎さんとの出会いを書いています。

ある日林町へ行くと、ひげを生やした細い体付の先客がいた。尾崎喜八と紹介された。朝鮮銀行に勤めて、京城にいたのを、そこを止めて、東京に戻つて来、直ちに高村を訪ねた日であつた。私は彼の名を「白樺」で知つていた。その頃は高村も尾崎も私もロマン・ロランに傾倒していた。それでアトリエを二人いっしょに辞して、帰り道夢中でしゃべり合つた。これが尾崎との長い友情のはじまりだった。

（「おもいで」）

尾崎さんの紹介で大正十年一月号の『白

樺』から翌十一年七月まで十三回に涉つて、高田の「ミケランジェロの手紙」が載りはじめます。高田は大正七年に郷里の福井から上京し、同郷の画家富沢直に誘われて高村さんを訪ねて以来その身辺にありました。富沢は水野葉舟を介して高村さんを知つていたといひます。高田は大正九年に東京外語学校イタリヤ語科を退学、大塚の二間きりの借家で結婚し、母と小さな妹と住んでいましたが、高村さんが岩波書店に紹介してくれたコンデイヴィの『ミケランジェロ伝』を訳すために、かつて石川啄木も居た本郷森川町一番地の蓋平館別荘に下宿していました。間もなく尾崎さんも芝からその下宿に合流します。高田が詳しい注をつけた『ミケランジェロ伝』が出たのは大正十一年六月になってですが、その訳者序に書き留めています。

この稿は昨年の六月に始めて十二月に終つた。（勿もミケランジェロの事を研べ出してからは三年になる）その間夏から冬まで私は親友尾崎喜八君と同じ家に住んでゐた。尾崎君はこの書の後に出るユデイト クラデルの「ロダンの人と芸術」を訳してゐた。（後不時な災害の為に同君はその原稿の半ばを失つたけれども）昼と夜、互ひに自分の仕事と翻訳にいそしみ、昼自身の仕事に没頭した事に勇気付けられて、夜訳筆を取り上げたあの生活を、私は忘れる事が

出来ない。この本の出るのを楽しみにし、励ましてくれた同君の友情に感謝する。この書をその記念ともしたい。気ながにこの本を待つて下さった他の友達諸君にも感謝する。

ここでも、かつて高村さんとの共訳を企て、火災で訳稿をすべて失ったというクラデルの本が現れます。そして今度も「不時の災害の為に」原稿の大半を失うのです。ただクラデルの本の「手記」の大部分はすでに高村さんによって翻訳され、『続ロダンの言葉』に納められているので、ここではどんな本が企画されたのかはよく分かりません。

高田は先に引いた「おもいで」のなかで「尾崎は高村に頼んでクラデルの『ロダン』を岩波から出す印税を前借して、毎月八十円を支給してほしいと交渉した。岩波は承諾した。……結局『ロダン』は刊行されなかった。」と補足し、当時の生活を次のように続けます。

下宿生活で、私は二階、尾崎は一階の部屋を占め、私は六畳の広さ一杯に参考書を並び、猿股一つになつて原稿を書きだし、尾崎は詩を書きはじめた。一つ出来ると飛んで来て読みあげた。彼の第一詩集『空と樹木』時代である。これはある日二人で向島の百花園まで散歩した折、あそこの炭焼の壺に尾崎がヴェルレーヌの『Le ciel est, par-dessus le toit,

Si bien, si calme! Un arbre, pardessus le toit, bercera palme』を書き込んだ、それから暗示されたいらしい。私もまたこの下宿で彫刻を始めた。

ヴェルレーヌの詩句はその昔、高村さんがパリで読んで感動して以来心を去らない『叡智』(“Sagesse” 1889) 第三部のVI、「屋根のむこうの静かに澄んだ空！屋根のむこうの葉をゆする一本の樹！」で始まる冒頭の部分。高田の最初の作品は「空と樹木」を飾った尾崎さんのブロンズ像ですが、尾崎さんもまたその詩集に日本で最初の高田論、「高田博厚君について」を書いてそれに応えます。

詩話会の編む新潮社の年鑑『日本詩集』1992版は「大正十年詩壇の主な事項」として五月に詩中心の雑誌『新詩人』の創刊を記録し、同人として井上康文、花岡謙二、荻原泰二郎、林信一、恩地幸四郎、尾崎喜八、宵島俊吉、竹村俊郎、多田不二、大藤治郎、藤森秀夫、相川俊孝、霜田史光、沢ゆき子、斎藤重夫の名を挙げ、初めて尾崎さんの詩「野薊の娘」「芝生」を掲載します。『新詩人』の実質的な主宰者は井上康文でした。

此の年、詩壇もまたひととき賑わいました。四月に千家元麿の詩集『野天の光』、光太郎訳エリザベト・ゴッホ『回想のゴッホ』、七月に日夏耿之介の『黒衣聖母』、

千家の『太陽の愛』が刊行され、十月には光太郎訳のヴェルレーヌ詩集『明るい時』も出ました。妻マルト、「私の傍に生きる者へ」贈ったその最初の愛の詩集を、高村さんは共に生きる智恵子のために訳したのです。そしてそれは結局のちの詩集『智恵子抄』の空白を埋めることになりました。長谷川巳之吉と大藤治郎が編み、長谷川の玄文社から芸術主張や同人制によらない詩誌『詩聖』が創刊されて、尾崎さんに発表の舞台を提供したのもこの月でした。十一月には有島武郎の『ホキツトマン詩集』第一輯が叢文閣から出、『明星』も十四年目に復活して、高村さんの「雨にうたるるカテドラル」を初めとする、新たな山稜が形成され始めるのです。

高村さんが詩「ベルリオの一片」を発表したのは『明星』十二月号ですが、それ以前の事として尾崎さんは書いています。

私達が蓄音機を持つようになったのは、その後「『ベルリオ自伝と書翰』が出た時から」しばらくたつてからだった。高村さんのはコロンビアの蓋付、私のはヴィクターの裸だった。レコードは相談して重複しないように買った。二人のを一緒にしても貧弱というべきレパートリだった。しかしその中で高村さんはベーターヴェンの「エグモント」を持ち、「ラズモフスキー四重奏曲」第三番のフーガを持ち、私はベルリオーズ

の「カルナブル・ロマン」と「ラコ  
ッチー行進曲」とを持つていた。

……浅草の中清や米久へ晚餐を食い  
に出かけて、したたか飲んで、酔歩  
まんさん、池ノ端から根津・団子坂  
を経て駒込林町のアトリエへ。さて  
それから本気になつて、午前三時頃  
までベートーヴェンを聴いた事さえ  
幾度かある。ベルリオーズの自伝と  
書翰の出た翌年、或る日私の不在の  
下宿へ高村さんがたずねて来て、置  
手紙をして「ラコッチー行進曲」の  
レコードを持つて行つたことがある。  
手帳を引き裂いて鉛筆で走り書きし  
たその手紙には、「ラコッチイを聴  
かざれば今夜眠りがたし。お留守な  
れども借用す」とあつた。こんな事  
はたえてしたことのない高村さんだ  
けに、私はこの尊敬する先輩の隔て  
のない仕方にかえつて感激し、その  
止む能わざる切迫した気持をいろい  
ろと楽しく想像した。

このあたりは大正十一年一月の『明星』  
に載つた高村さんの詩、「わたしと友とは  
有頂天になつて、／いかにも身になる米久  
の山盛牛肉をほめたたへ、／この剛健な人  
間の食欲と野獣性にやみがたい自然の声  
をきき、／むしるこの世の機動力に斯かる  
盲目の一要素を与へたものの深い心を感じ、」  
る「米久の晚餐」の背景でもあつた  
のでしよう。

高村さんは「触覚の世界」（昭和3・12）  
というエッセイの中で「私は一時、一晩で  
も音楽をきかないと焦燥に堪へられない時  
があつた。今考へ合せてみると、それは私  
が制慾剤ルブリンで僅かに一日を支へてゐ  
た頃の事である。」と書いていますから、  
楽しいとのみは言い切れませんが。

高村さんの書いた「ベルリオの一片」は  
のち大きく改作されて「ラコッチイ マア  
チ」になりましたが、オーストリアに対す  
るハンガリアの革命の指導者フランシス  
ラコッチイの名を持つこの民族的な行進曲  
を編曲し、初めて演奏するベルリオーズの  
姿を描いたその詩に響き返す様に、尾崎さ  
んは、燃え立つ青春の思いに溢れる詩「カ  
ルナブルロマン」（「ローマの謝肉祭」）  
を、殆どかけ目のない技巧で書いてそれ  
に応えています。そんな煮えたぎるような  
詩と音楽の時代でした。「カルナブル  
ロマン」はいまだに理解されないままでいる  
オペラ「ベンヴェヌウト チェリイニ」第  
二幕の序曲として後に書き足されたもので、  
「ラコッチイ マアチ」は劇的カンタータ  
「ファウストの劫罰」の第一部のフィナー  
レに置かれましたが、いずれも単独な名曲  
としてしばしば演奏されるものです。

## V 最初の詩集

『新詩人』に始まつた尾崎さんの詩の舞

台は、『詩聖』や『日本詩人』『成長する  
星の群』から『嵐』『帆船』などの同人誌、  
『読売』や『時事』などの日刊紙にまでひ  
ろがって行きました。自分を世の中に押し  
出す二つの詩集の構想が生まれたのは、か  
なり早い時期だったように思われます。詩  
集の名前は突然天啓のように来しました。『空  
と樹木』とせしもう一冊の小さい詩集『風  
に吹かれる草』。その報せを受けた高村さ  
んは直ちにエールを送ります。

御葉書見ました。あなたの二つの  
詩集を私がどんなにたのしみに待つ  
てゐるかは、恐らくあなたの想像以  
上でせう。あなたが詩の世界に出て  
来た事は、私等の心強さを増す事で  
す。

唯一至上のもの、さうです。それ  
より外はありません、その命ずるま  
まに各自が生きるより外は。そして  
日常の瑣事が悉く光を發して詩歌と  
なる世界へ入る事です。

私はこの頃自分の内の火の、自分  
一個のものでない事を驚き感じてあ  
ます。この炎に形を与へることこそ  
一大事。

尾崎さんに与えた光太郎書翰の大部分は、  
残念なことに何時の頃か失われて残りませ  
ん。これは『詩聖』大正十一年六月号の随  
想「碧落莊私記」に尾崎さんが記録したも  
のです。

小さい詩集は結局陽の目を見ませんでし

だが、最初の詩集『空と樹木』は大正十一年五月十日、玄文社詩歌部から刊行され、第一部「我がリトム」が「高村光太郎兄に」、第二部「空と樹木」が「千家元麿兄に」贈られます。玄文社は後の第一書房です。

高村さんに親しんだ初めが『道程』時代であることを思えば、完璧に近いこの詩への出発はいかにも尾崎さんらしいと言つていいでしょう。詩集の「序」で尾崎さんはその詩的出発を宣言します。

たとへ如何なる環境にあつても私は歌うことを第一としたい。……人間としての私の存在の理由は、私自身がより正しく生きる事によつて歌ひ、より明らかにより美しく歌ふ事によつて生きるといふ、この単純で熱烈な要求を実行する事の外にはない。それでこそ私の生存に言訳が立つのである。そしてこの事は理屈でもなければ空想でもなく、常に私のうちに生きて育つてゐる実感である。

『空と樹木』を読むものは、水野葉舟一家、ことに健気な幼いカテージメード実子や、移り住んだ田園の風物が、湧きあがる源泉の清烈な水のようにきらめくのを見ます。野口米次郎を知り、田中冬二を知り、中野秀人を知ったのもこの頃でした。

『空と樹木』はしかしもう一つの重要な出来事を生みます。英文で書いた手紙を添えて詩集はスイスのロマン・ロランにも送

られ、そして七月十六日の美しい朝に、「水色の封筒に小鳥の抜毛のような特徴のある文字で、端麗でしかも雄勁に書かれた」ロランの返事が届きます。

幸いにロランが、おそらく詩集が届いた直後の六月二十四日、スイス、ヴィルヌーブのヴィイラ・オルガで書いた手紙が記録されていて、みずず版『全集』36の「日本人への手紙」に訳文が収録されています。

親愛なる尾崎喜八

愛情のあふれたお手紙とご本とを受け取りました。心からお礼を申します。あなたの詩が読めないことを悲しく思います。あなたのお写真の姿は、私には未知のものではありません。私の友のリヒアルト・シュトラウスが若かった頃とよく似ているところがあります。彫刻もりつぱで、ロダンの作品にひじょうに近いもののように思われます。

私の作品が日本であなたがたのような読者や友を見いだしたことをうれしく思っています。私の作品が、世界のいたるところで迫害をうけている人間の自由を擁護することに、役立ちますように！ またあなたがた極東の民族と、われわれ西洋の民族とに、精神的な友愛の関係を作りだしますように！ 私自身にとつてはもう久しい以前から、私の精神は国境というものを認めずにいます。

私たち自身の個性をいささかも否定することなしに、いやむしる個性を高めつつ、人類の大交響曲を作曲しだすことに努めましょう。

あなたのお手を握りしめます

ロマン・ロラン

それがどんなに尾崎さんを感激させ、むしろ狂喜させたかは想像にあまりありません。そしてその「ロマン・ロランの友の会」のそもその始めがここに芽生えるのです。

高村さんもまたジュネイヴのサブリエ書店から出版されたロランの戯曲『リリュリ』訳を、此の年十月の『明星』から連載し、翌年二月に終ります。雑誌がロランに届けられたことは、五月十七日に作られたローマ字の詩「[L. L.]」の草稿に書き添えたメモ、「『明星』をロマン・ロランに送り返す返礼として同氏より『リリュリ』を贈らる。此日到着。」からも分かります。

フランス・マズレルの版画三十二面を添え、自ら原本の趣を再現した木版を彫つて装禎した『リリュリ』訳本は、大正十二年九月の関東大震災を挟んで、大正十三年五月に古今書院から発行されました。

## VI 結婚前後

尾崎さんについて言えば、大正十二年六月に仏蘭西書院から刊行したベルリオ『ベートーゲン交響楽の批判的研究』の残本の

大部分を九月の震災で焼き、父と和解し、「江渡幸三郎氏の家の近く、東京府豊多摩郡高井戸村大字上高井戸の畑地の中に一戸を新築して」、独身最期のクリスマスを祝いました。震災に先だつ五月には島津謙太郎の名に隠れて『詩聖』に尾崎さんの「高村光太郎論」が載り、八月の『日本詩人』には高村さんに贈る、積年の思いを込めた長大な詩「古いこしかた」があったことも記録して置きましょう。

水野実子との結婚は大正十三年三月のことでした。狄嶺江渡幸三郎は大正二年から高井戸村に住み、水野葉舟は大正四年から平塚村下蛇窪に住んで親しい交わりが続いていました。狄嶺の年譜は大正五年頃の頃に、この頃、「水野葉舟、山村暮鳥、高村光太郎、下中弥三郎、柳敬助らを知る」と書き留め、妻ミキの残した日記にも高田博厚、更科源蔵らの名が現われます。高田は大正十一年半ばには狄嶺の首を作り初めていました。

尾崎さん移住前後のミキの日記、

大正十二年十月二十八日 日 尾

崎さん一人、外に服部さん、高田博厚さん、何れも食事の支度にて大忙。

大正十二年十一月十七日 土 尾

崎さんの建上でき。夕方、服部さんお出でになり泊る。皆で温床の障子貼り、尾崎さん大いに

働いて下さる。

大正十三年三月二十日 木 尾崎

さんの結婚日なり。お母さんお出でになる。水野家よりは御母堂・大久保さん・高村さん・水野さんお出でになる。尾崎さんより、折を五人分頂く。吉田先生お出でになる。

結婚式では尾崎さんの介添えは狄嶺が、新婦の介添えは高村さんがつとめています。ほとんど収入にもならない詩を書き、幾らかは生活の足しになる散文や翻訳の仕事をしながらの自給自足の日々でしたが、ここにはつぎつぎに沢山の友達がやって来ました。

高田博厚、片山敏彦、上田秋夫のような連中は狄窪や西狄窪に住んでいて近くもあったので、頻繁に訪ねてもくれば訪ねても行った。

高村氏も何回か来た。一度は智恵子さん同伴だった。中野秀人も菊岡久利もたびたび来た。一々名を挙げれば切りは無いが、更科源蔵と真壁仁の名は書いて置きたい。みんな若くて燃えていて、それぞれの人が固有の夢と信念とを育んでいた。武蔵野高井戸の田舎の小屋に談論は風発し、ヴィクターの小函からベートーヴェン、バッハ、ベルリオーズの音楽が流れた。二人の女、新妻実子とその妹とは台所でくるくる舞だった。

(「年譜」)

六月、その新生活を自祝するように、尾崎さんは新詩壇社から第二詩集『高層雲の下』を刊行しますが、その扉にはロマン・ロランへの献辞“AU TRÈS GRAND ET CHER/Romain Rolland/Sincèrement /K.O.”が印刷されていました。

## Ⅶ ロランと光太郎をめぐる人々

震災の年の暮れ、当時東京外国語学校のドイツ語科の生徒だった田内静三が高田博厚に遭います。田内は高知生まれで、高田と同じ年でした。翌年春、田内は高田につられて光太郎アトリエに行き、田内は高田を片山敏彦に引合わせます。その片山や田内を尾崎さんに紹介したのも高田だったし、片山を高村さんのところに連れて行ったのも高田でした。同人雑誌『大街道』は、それに片山の高等学校時代からの友人吉田泰司が加わって、大正十三年の九月に創刊されました。それが具体的にはロマンのロランの友の会に移行することになるので、しかしその前提として、ロマン・ロランをめぐる日本の出版界の一つの動きも記録しておかなければなりません。高村さんの「リリュリ」訳が古今書院から刊行されたのは同じ大正十三年五月でしたが、その巻末に書院主のロマン ロラン



訳書刊行趣旨が添えられています。

今日、全欧羅巴の闇を照す唯一の光りであり、その燃ゆる良心であり、何にも優つて「魂」の自由と、正しさと、剛健さを愛するロマン ロマンの著作に溢れた、真に雄々しきものの、真に麗しきものは、混濁の世に在つて一路を精進する不断の若き魂に、如何ばかりの慰めと力を与へることか！ 彼は、世界の何処の隅からでも、この信頼すべき「仲間」が生まれ出るのをじつと偵察し、待つてゐる。今最も興味深く、希望ある日本に、彼の精神、または彼を中心とする「ユーロウブ」の様な雰囲気が醸され横溢することを希ふ。

既にロマン ロマンの邦訳書は数多出版されてゐる。これらは、それぞれよき役目を果たした事と思ふ。日本に取つてロマン ロマンは目新しくはない。が何はあれ、私は如上の為にのみ今後彼のものよき訳書を出版して行きたい。敢て全集を期しもしなければ、また急ぎもしない。大袈裟にもやらない。只もつとも信頼し得る訳書を、最も応はしき訳者を得るに従つて出版して行きたい。故にこれは別に系統的にはならないだらうけれども、他日これらが自づと全集の形に纏まるならば、ロマン ロマンの為、また日本のよきものゝ為、私は自分から願ふ喜ばしき義務

を果す訳である。茲にロマン ロマンの訳書刊行の趣旨を明かにし、併せて本計画中の近刊書目を公開する。

リリユリ 高村光太郎訳  
ベートオエン 高田 博厚訳  
ピエルとリュス 田内 静三訳  
時は来らん 片山 敏彦訳  
ミレー伝 高村光太郎訳  
古代への音楽紀行 大沢 章訳  
ガンヂー 片山 敏彦訳  
コラ ブリュニヨン 高村光太郎訳  
以下続刊

大正十三年四月二十五日

古今書院主人

古今書院は岩波書店で修行した橋本福松が、大正十一年に創業した出版社で、のち地理学関係の専門出版社として知られるようになりました。おそらくこの趣意には高村さんの考えも多分に取入れられている気配がありますが、訳者のなかに尾崎さんの名前はまだ現れません。大沢章は明治二十二年に東京帝国大学を卒業。大正九年、フランス留学中にロマンの知遇を得、『先駆者』の翻訳を許されたりしています。

大正九年から十年にかけて、豊島与志雄の『ジャン・クリストフ』訳が新潮社から出、未完に終わった木村荘太の『ロマン・ロラン全集』が、同じ頃人間社出版部から刊行され、雑誌『種蒔く人』もロランに関心を持ったりしましたが、古今書院の企て

はみずみずしいもう一つの新たな胎動でした。

秋には高村さんの木彫小品の会が発表され、久しぶりに沢山の短歌が生まれました。飛びたつとき吾が手な搔きてゆきし蟬の足の力の忘れられなくに

小刀をみな研ぎをはり夕闇のうごめくかげに蟬彫るわれはなどにまじつて

たのめてしかぶと虫をば高井戸の

尾崎喜八は今宵かも採る

さいかちのかぶとの角を手に持ちて

友も見つしおどろきてあらん

の歌があり、尾崎さんの「駒込にある友達  
の彫刻家が／兜虫をほしいと書いてよこしたその日から、／雲の飛行さへ消息めいてなつかしい／日本の初秋の空の下、／武蔵野の片田舎では昨日も今日も兜虫狩！」で始まる詩「兜虫」（大正13・9・5『東京朝日新聞』）と照応します。

まはだかになりてわが書く夏の詩を

のぞきたまふかヴェルハアランは

ひとむきにむしやぶりがつきて為事する

われをさびしと思ふな智恵子

この人を見よ

ヴェルハアランはわがごとく

妻を恋ふゆゑ問無くし作れり

わがわかき高田博厚剛腹の

てのひらをもて風をとらへぬ

などの歌もあつて、当時の高村さんとそれを取り巻く雰囲気がうかがわれます。

『明るい時』に続く、高村さんのヴェルハアラン詩集『天上の炎』訳が新しき村出版部から刊行されたのは、大正十四年三月のことでした。尾崎さんのヴェルハアラン詩の翻訳もまた、殆ど大正十三、四年に集中します。後年、随筆「詩の勉強」（昭和14・10『新女苑』）の中で高村さんは年若い友、尾崎喜八、高田博厚、片山敏彦、高橋元吉の名を挙げ、「尾崎喜八君とよく炉辺でヴェルハアランを読み合つた楽しい日の数々を思い出す。ヴェルハアランからは其の伝統を背後に持つ秀麗なりとムと、壮大な構想と、熱烈な気魄と、真摯な人間性とを十分に味読した。」と書いたのは、震災を隔てて、この前後まで続く記憶でしょうか。

この年、高村さんは黄瀛や中野秀人の首を手掛けていました。

当時「東京朝日新聞」の文芸部記者だったや中野秀人が、こんなエピソードを書き残しています。

高村光太郎さんは、すでに世間的には有名であつたが、詩人のことであつて見れば、新聞社としてはたいした取引はなかつた。私は、私の好みから彼のアトリエを訪れるようになったのである。詩人の尾崎喜八さんの高村熱はたいしたもので、道で会つと、「何処に行くのだ？」と尋ねる。「高村」と答える。「うん、

高村か」ともう眼の色が変つている始末であつた。私は、高村参りをしているように思われたくないので、こつそりと一人で行つた。思えば、無邪気と言おうか、バニターと言おうか、大正末期にそうした情熱の時<sup>1</sup>代があつたのである。

私の「首」が作られたのは勿論本郷駒込のアトリエに於てであつた。……私は、私の「首」が制作される間じゆう、死なないことを工夫していたように思う。

（彫刻、その『首』について）昭和33・2『高村光太郎全集月報11』

高村さんに散文詩「ある首の幻想」（大正16・6『東京朝日新聞』）があり、尾崎さんに「中野秀人の首」（昭和3・1『詩集』）、中野自身に「首」（昭和5・2詩集『聖歌隊』）の詩があります。

六月には、尾崎さんに長女栄子が生まれました。

七月にはまだ光太郎の名を知らない十二歳の草野心平が、排日の余波をうけて動乱の中国広州嶺南大学から舞い戻り、九段の黄瀛の下宿曾寓に転がり込んで、中身だけ持ち帰つた『銅鑼』三号の発送を始めます。

（つづく）

以下予定

4 「ロマン ロランの友の会」とその後  
5 戦乱のなかで、そして高原

### 尾崎喜八資料・特別号

『尾崎喜八資料』（以下、「資料」）は、二〇〇〇年十二月に十六号を刊行して以後尾崎實子の逝去（二〇〇二年）の影響、経済的・人的な困難もあつて休刊いたしました。が、特集「尾崎喜八と高村光太郎」の後編のために、北川太一先生からお預かりした原稿が残つておりました。

尾崎榮子が逝去する前年、すでにインターネットで尾崎の全著作、『資料』の公開を手がけてくださったいた広島満嶋明さんにその原稿をお渡しして、「『資料』のデータ化が済んだらば、最後にこの原稿も加えてください」とお預けしたものが、この特別号となりました。

この特別号は、インターネットサイト「詩人 尾崎喜八」の『尾崎喜八資料』の末尾に加える形での公開といたします。同時に、尾崎喜八を偲ぶ蠟梅忌、高村光太郎を偲ぶ連翹忌において、それぞれご参加の方々にコピーをお配りいたします。

## 神奈川県近代文学館への

### 寄贈・未来に向けて

現在、神奈川県近代文学館と遺族（石黒敦彦）の間で、原稿・草稿類の寄贈、乾板を中心とした写真・フィルム等の寄贈についての合意が進んでおります。二〇一九年〜二〇二〇年の二年間に、遺族間で順次、原稿類の整理、写真のデータ化を進めてから、寄贈していくことで合意しております。

写真資料については、近代文学館だけでなく富士見町、杉並区なども相談の上、適宜、それぞれの館の事情に合わせて寄贈・寄託を行ってまいります。

また、他にも（まだ話の端緒にあるものですが）地方でPO化しての著作の保存を教育委員会で検討していく動きもございます。これらに対して、資料的、展示的にできるかぎりの対応をしていくことが、残された最後の遺族としての石黒の仕事と思っております。

おりしも昨年二〇一八年には、版画家・栗田政裕氏による詩画集『花咲ける孤獨・抄』の刊行と展覧会（養清堂画廊五十年記念事業）、安曇野市『田舎のモーツァルト音楽祭』二十周年、ハインリッヒ・シュッツ合唱団五十周年などの公演において、尾崎

喜八の詩業を二十一世紀の世代につなげる機運がございました。

明治生まれの詩人の言葉が二十一世紀に生き続けていく現場を前にして、生誕百三十年に向けて尾崎喜八の詩業を遺していくことの大切さを感じております。

■二〇一三年に尾崎榮子さんからお預かりしていた「尾崎喜八と高村光太郎・後編」にあたる北川太一さんの二篇を『尾崎喜八資料・特別号』として掲載することができ、ようやく責任が果たせたと思います。

加えて、堀隆雄さんが入力された尾崎喜八「ある夜（創作）」も載せることができましたことも嬉しい限りです（大正八年、初期の作品で、単行本にも未収録です）。

尾崎喜八研究会からの印刷物として発行することは困難なことから、ごく一部でコピー配付をする他は、インターネットでの公開となりました。

体裁を従来の『資料』に似せてはいますが若干異なります。ご容赦下さい。

■尾崎喜八訳詩のベートーヴェン「歓喜の頌」を録音した日本ヴェイクターのレコード

（一九四三年）をお持ちの、望月ハルヒ（ペンネーム）さんからホームページ宛にレール写真を送って頂きましたのでご紹介いたします。

このレール写真のカラー版、録音についての資料をホームページ「詩人 尾崎喜八」の「その他」に掲載していますのでご覧下さい。

なお、録音された演奏音源も望月さん投稿のYouTubeで聴くことができます。こちらは「日本人初の第九のレコード 歓喜の頌」で検索してください。



■ホームページは「詩人 尾崎喜八」で検索できます。また、スマートフォンで閲覧しやすい《スマホ版》の「詩人尾崎喜八」も開設しております。数編の詩集のみですがパソコン版と併せてご利用下さい。スマホ版の検索は「尾崎喜八 スマホ」でお願いします。

■ホームページ掲載作品の校正作業が進んでおりません。ご協力下さい。誤謬を見つけたらホームページ記載のメールアドレス (shijin.ozakihachi@gmail.com) にてお知らせ下さい。



高村光太郎より贈られたオルガンを弾く尾崎喜八  
昭和三十四年一月、上野毛にて、三宅修撮影

註：オルガンについては尾崎喜八資料第十三号参照。

よろこび  
歡喜、聖なる神の焰よ、  
耀く面もて我等は進む

裂かれし者等を合はず汝が手に  
もろびと結びて同胞となる。

心の友垣、操の妻を

かち得し者等は集ひて歌へ。

おのれを憑みて驕れる者に、

此の世の眞のよろこび有らじ。

よろづの物皆、自然を生きて、

なべての人皆、光に浴みず。

友等と、力と、愛とを降す

御神の姿の在らぬ隈なし。

あゝ、造物主、日の神の

遙けき御空を天駆けるごと、

行け、汝が道を、勝利の道を、

勇みて、つはもの行くがごとく、

行け、我が友よ、いざ行け、友。

捧げよ、諸人、人の誠を

父こそ、ゐませ、星空の上に。

仰げよ、同胞、けだかき父を。

ひとりの父を、星空の上に。

序句 (但しシラーの作にあらず)

おゝ、友、  
それならぬ、  
楽しく、深く、  
歡喜に満てる歌を。



「受苦の金曜日」を清書する尾崎喜八